

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

On Elias Canetti's "The Tongue Set Free" („Die Gerettete Zunge")- Love-Hate Relationship with Mother -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/11478/00001608

エリ阿斯・カネッティの『救われた舌』について (2)

— 母親との愛憎関係 —

田 中 豊 (社会環境学部 社会環境学科)

On Elias Canetti's "The Tongue Set Free" („Die Gerettete Zunge“)
— Love-Hate Relationship with Mother —

Yutaka TANAKA (Department of Social and Environmental Studies)

Abstract

The Canettis who moved from a little village Rustschuk to Manchester, England have started their new life. But they encountered with their Father's sudden death. Grandfather's curse on Father seemed to be realized. Mother was also involved in Father's tragic death. The damaged conjugal relationship might bring about the fatal cardiac stroke. After Father's death Mother decided to return with her three children to Vienna, Austria: her second home.

On their way to Vienna Mother taught Canetti German language excessively. Learning German language meant Canetti's rebirth in double meanings. It laid the foundation of his becoming a writer who wrote his works throughout his life in German language. And Mother's lecture on German literary works and reading them together with Mother enabled Canetti to acquire Mother's cultural, spiritual strength directly. For Mother it was an effort to recover from her pain of her losing the partner with whom she spoke in German language.

Though young but being both a strong character and an enthusiastic literary reader and listener, Canetti gained her favor and they spent perfect and full evenings reading literary works by themselves. Now enslaved by Mother, Canetti did everything to avoid the third person's invading between them.

Key words: *Grandfather's curse, Father's death, learning German language, return to Vienna, Mother's lecture*

前稿でわれわれは『救われた舌』の第1部、2部をかなり詳細に引用しながら母と子の関係を眺めてきたが、第3部に移る前に、冒頭の Lebensparabel (人生のたとえ話) について、その意味するところを考えてみよう。すぐれた絵画と同じようにおのずとその意味も輪郭を見せるであろうと、曖昧なまま結論を先送りしたが、あえてここで結論、結語らしきものを提示し

ておきたい。

自分の舌が切り取られるかもしれないという恐怖心と、その難を逃れ救われた舌という表現は深い比喩的意味を担っている。これは作家カネッティの存在それ自体がかかった決意と自信を表現したものである。なぜならいかなる作家になろうとも、その前段階に人間としての自立が前提となるし、人間としての自立には自分の言葉、自分自身で考え抜いた物真似でない独

平成14年5月20日受付

自の言葉が要求される。われわれが絵画、それもすぐれて個性的な絵画に向き合うとき、圧倒される内実は、これまで一度として見たことのない、未経験の世界や人間を目の前に突きつけられているという感覚的衝撃が最初に来るであろう。一般的に個人的経験は限定されたものかもしれない。しかしこのような絵画に向き合ったのは初めてで、それまで自分に未知だった世界の何かを教示されたということがすべてであり、それ以外の副次的なものは隅に追いやられてしまう。われわれ個人の物事の思考の中味も、実はこの経験と大して違いはない。書物によるしろ具体的なひとりの人間によるしろ、新しい考え、前人未踏の思想との出会い、初めて提示される新鮮な世界観やものの見方、それらに圧倒されてわれわれは語る言葉を、つまりは語るべき自分の舌を失ってしまう。成長過程で遭遇するこのような世界と人間に対する経験は、常に新しい何かを追求する者の周囲に渦巻いている。その衝撃的経験の奥底に沈潜し、新しい言葉と世界を理解しようとするとは、さらなる成長のために必要だが、しかしそこからまた自分自身の言葉、自分の舌で語るべき世界を求めて一歩でも足を踏み出し、先へ進まねばならない。

これこそ若い作家の前段階、あるいは著作家として出発する第一歩であろう。この難題を前にして、自分の言葉で世界を考える絶好の機会に失ってはならない。ではどうすれば自分の舌を失うことなく、その道へ踏み出せるだろうか。

夏目漱石は死去する2年前の47歳の時、学習院で行った講演「私の個人主義」で次のように述べている。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何をして好いか少しも見当が付かない。私は丁度霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです。そうして何処からか一筋の日光が射して来ないか知らんという希望よりも、こっちら探照燈を用いてたった一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどっちの方角を眺めてもほんやりしているのです。ぼうっとしているのです。あたかも囊の中に詰められて出る事の出来ない人のような気持がするのです。私は私の手にただ一本の錐さえあれば何処か一カ所突き破って見せるのだがと、焦燥り抜いたのですが、生憎その錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどう

なるだろうと思って、人知れず陰鬱な日を送ったのであります。

私はこうした不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、また同様の不安を胸の底に畳んで遂に外国まで渡ったのであります。しかし一旦外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるには極めています。それで私は出来るだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見付りそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。詰らないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなって来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救う途はないのだと悟ったのです。今までは全く他人本位で、根のない萍のように、其所いらをでたらめに漂っていたから、駄目であったという事に漸く気が付いたのです。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしましういわゆる人真似を指すのです。一口にこういってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審がられるかも知れませんが、事実は決してそうではないのです。

われわれはすでに、社会あるいは既存のシステム自体が要求する思考に慣れ親しみすぎていないだろうか。通念上の、世間に流通する何となく習得した言葉の、本来的純粋な世界を意識することなく、安易に考えや思いを発話していないだろうか。カネッティは自伝執筆時点で、作家としての決意をたとえ話の形で提示し、恐怖心を抱きながらも、幸運か運命のいたずらか、切り取られずにすんだ自分の舌とおのれに対する堂々たる矜持の念を宣言しているのだと考えることはできないだろうか。あるいはいかなる未来にしろ、救われた自分の舌で言葉を操っていく覚悟と取るべきか。それでも舌を切り取られ、語る言葉を喪失する不安はあるだろう。しかしいかなる事態に立ち至ろうとも、おのれの舌を守り、おのれの言葉と格闘できる幸運を暗示的に表現しているのである。

これは現に今、自伝を書き進めている老年のカネッティであるだけでなく、人生を回顧的に振り返りながら、その時その時の自分に成り代わった少年時代のカネッティでもあろう。われわれは回想という時間軸のなかでは、複雑に重なり合った複数の自己を生きることができる。これを、物理的極限化された微分的時間、個人には体験不可能な瞬間の時間と区別して、ある哲学者に倣い、立ち現れる時間と呼ぶことにしておこう。次から次へと立ち現れるカネッティの時間は、具体的情景と人間を描き出し、単なる抽象的な哲学的概念を操るのではなく、生き生きとした人物が登場する臨場感あふれた場面に満ちており、躍動感を持つ人々の息吹を伝えながら、読者の脳裏に鮮明な人物像と世界を残すのである。

幼年時から青春の門口に到る母への精神的な全面的盲目的依存、同時に母親と言葉への愛着、つまり書物への強い執着をいかに切り抜け、自分の舌、自分の著作を持つことができるのか。また「耳の中の炬火」でわかるように、カール・クラウスへの崇拜に近い無条件の傾倒、ベルリン時代の周りを取り巻く騒々しい猥雑さからどんな精神的自立の道を選択することができたのか。加えてゾンネン博士への無私とも言える完全な信頼、常にカネッティの周囲の世界には、自分の舌を失うかもしれない精神的従属への危険、あるいは陥穽が待ち受けている。これ乗り越えるには何が必要だったのか。自伝の主人公たる少年カネッティは、自分の舌に相応しい言葉と表現を見つけようとして、苦悶しながら母親からの精神的自立に向かう戦いを続けるのである。

ローザンヌで母親に連れられて訪ねた人物と、そこから招来する奇妙な母子の会話を『救われた舌』第3部への入り口にしよう。

ドイツ語の実際の運用を試すべく、カネッティは張り切って母親のお伴をする。アフタリオン氏はスペインの最高の金持ちだった。「そのような人は、私たちの中には今やもう存在しない」と母は述べた。アフタリオン氏はかつて母との結婚を望んだが、当時、母はすでにカネッティの父と密かに婚約していた。「そうでなかったら、私はひよっとすると彼と結婚していたかもしれない」と母は述べた。それを知った彼は非常に悲しみ、何年もほかの女性を望まなかった。よう

やく今、つい最近結婚して、妻のフリーダと新婚旅行でローザンヌの最高級ホテルに滞在していた。

Wir kamen in einen Palast von einem Hotel, ich hatte so etwas noch nie gesehen, ich glaube sogar, es hieß >Lausanne-palace<. Herr Aftalion bewohnte eine Suite von riesigen, luxuriös eingerichteten Räumen, ich kam mir vor wie in >Tausendundeine Nacht< und ich dachte mit Verachtung an das Haus des Onkels in der Palatine Road, das mich noch vor einem Jahr so beeindruckt hatte. Eine Doppeltür ging auf und Herr Aftalion erschien, in einem dunkelblauen Anzug, mit weißen Gamaschen, kam übers ganze Gesicht lächelnd auf die Mutter zu und küßte ihr die Hand. „Du bist noch schöner geworden, Mathilde“, sagte er, sie war in Schwarz gekleidet. „Und du hast die schönste Frau“, sagte die Mutter, sie war nie auf den Mund gefallen. „Wo ist sie? Ist Frieda nicht da? Ich habe seit dem Institut in Wien nicht mehr gesehen. Ich habe meinem Sohn so viel von ihr erzählt, ich habe ihn mitgebracht, weil er sie unbedingt sehen wollte.“ „Sie kommt schon. Sie ist noch nicht ganz fertig mit ihrer Toilette. Ihr beide müßt indessen mit etwas weniger Schönerem vorliebnehmen.“ Es ging sehr gewählt und artig zu, den großartigen Räumen angemessen. Er erkundigte sich nach den Absichten der Mutter, hörte sehr aufmerksam, aber immer noch lächelnd zu und billigte die Übersiedlung nach Wien mit märchenhaften Worten. „Du gehörst nach Wien, Mathilde“, sagte er, „die Stadt liebt dich, in Wien warst du immer am lebhaftesten und am schönsten.“ Ich war nicht ein bißchen eifersüchtig, nicht auf ihn, nicht auf Wien, ich erfuhr, was ich nicht gewußt hatte und was in keinem meiner Bücher vorkam, daß eine Stadt einen Menschen lieben könne, und es gefiel mir. Dann kam Frieda und sie war die größte Überraschung. Eine so schöne Frau hatte ich noch nie gesehen, sie war hell wie der See und prachtvoll gekleidet und behandelte die Mutter, als wäre sie die Fürstin. Sie suchte aus den Vasen die schönsten Rosen zusammen, gab sie dem Herrn Aftalion, und der überreichte sie mit einer Verbeugung meiner Mutter. Es war kein sehr langer Besuch, aber ich verstand auch nicht alles, was gesagt wurde, das Gespräch wechselte zwischen Deutsch und Französisch ab, und gar so gut war ich in beiden Sprachen, besonders aber im Französischen, noch nicht beschlagen. Es kam mir auch vor, als wäre manches, was ich nicht verstehen sollte, auf französisch ge-

sagt, aber während ich sonst auf solche Geheimgespräche der Erwachsenen mit Ingrimme reagierte, hätte ich von diesem Sieger über Napoleon und seiner wunderbar schönen Frau noch ganz anderes freudig hingenommen.

私たちはあるホテルの宮殿に入っていった。そういったものを、私はまだ一度も見たことがなかった。それはクローザンヌ・パラスとさへ呼ばれていたと思う。アフタリオン氏は大きな、贅をこらした家具調度の備わった一続きの部屋に宿泊していた。私はく一夜物語へ入り込んだように思えた。そして私はバラチン・ロードの伯父の家を軽蔑しながら思い浮かべた。まだ1年前には、私に強い印象を与えた家を。二重扉が開き、アフタリオン氏が姿を見せた。紺のスーツに身を包み、白いゲートルで、満面微笑みながら母に向かって歩いてくると、その手にキスをした。「あなたはまたいっそう美しくなりましたね、マチルデ」と彼は言った。母は黒い服に身を包んでいた。「そしてあなたは最高の美人を奥さんにしたのね」と母は言った。母が言葉に詰まることは決してなかった。「彼女はどこにいるの？フリーダはここにいないの？私はヴィーンの学校以来、もうずっと彼女に会っていません。私は彼女について息子に多くのことを話して聞かせました。息子がフリーダに絶対会いたいと言ったので、一緒に連れてきました。」「もうすぐ姿を見せるでしょう。彼女はまだお化粧が済んでいません。あなたたち二人はその間、美とは程遠い私で我慢しなければなりません。」会話は堂々たる部屋にふさわしく、上品に優雅に進められた。彼は母の意図を尋ね、非常に注意深く、しかし相変わらず微笑みながら耳を傾け、おとぎ話のような言葉でヴィーンへの移住に同意を示した。「あなたがヴィーンへ行くのは当然だ、マチルデ」と彼は言った。「その街はあなたを愛している。ヴィーンであなたはいつも一番生き生きして、一番きれいだった。」私は少しも嫉妬を感じることはなかった、彼にもヴィーンにも。私は自分の知らなかったこと、私の書物のどこにも現れないようなことを経験した。つまり、ある街がひとりの人間を愛することができるということを。それが私には気に入った。それからフリーダが姿を見せたが、彼女は最大の驚きだった。そんなにも美しい女性を、私はまだ一度として見たことがなかった。彼女は湖のように明るく、衣服は豪華だった。そして、まるで母が公爵夫人であるかのように扱った。彼女は花瓶からもっとも美しいバラを何本か探し集めると、それをアフタリオン氏に手

渡した。すると彼はお辞儀をしながら、それを私の母に差し出した。それほど長い訪問ではなかったものの、語られたすべてが私に理解できたわけではなかった。会話はドイツ語になったり、フランス語になったりした。私は二つの言葉に、特にフランス語には、まだそれほど堪能ではなかった。だから私がわかってはならぬことが、少なからずフランス語で話されたようにも思えた。しかし普通なら、大人たちのそのような秘密の会話には憤怒で反応するのに、私はこのナポレオンの勝者と彼の素晴らしい美人の妻からは、まったくちがうこととして、嬉しい気持ちで受け入れたことだろう。

Als wir den Palast verließen, schien die Mutter ein wenig verwirrt. „Beinahe hätte ich ihn geheiratet“ sagte sie, sah mich plötzlich an und fügte einen Satz hinzu, über den ich erschrak: „Dann wärest du gar nicht auf der Welt!“ Ich konnte mir das nicht vorstellen, wie konnte ich nicht auf der Welt sein, ich ging neben ihr. „Ich bin doch dein Sohn“, sagte ich trotzig. Ihr tat es vielleicht leid, daß sie so zu mir gesprochen hatte, denn sie blieb stehen und umarmte mich heftig——mitsamt den Rosen, die sie trug und lobte zum Schluß noch die Frieda. „Das war vornehm von ihr. Sie hat Charakter!“ Das sagte sie sehr selten und schon gar nicht von einer Frau. Ich war froh, daß ihr die Frieda auch gefallen hatte. Wenn wir in späteren Jahren von diesem Besuch sprachen, pflegte sie zu sagen, sie sei mit dem Gefühl weggegangen, daß alles, was wir gesehen hatten, diese ganze Herrlichkeit, eigentlich ihr gehöre und sie habe sich über sich gewundert, weil sie gar keinen Groll gegen Frieda empfand und ihr neidlos gönnte, was sie keiner anderen Frau gegönnt hätte. (Deutsch am Genfersee)

私たちが宮殿をあとにしたとき、母は頭が少し混乱しているようだった。「すんでのところ、私は彼と結婚したかもしれない」と彼女は言い、突然私をじっと見つめて、私を驚かせる文章を付け加えた。「そうだったら、まさしくおまえはこの世にいなかったわ！」私にはそれが想像できなかった。どうして私がこの世にいないなんてあり得よう。私は彼女と並んで歩いていた。「だって私はあなたの息子です」と、私は反抗しながら言った。そんな風に私に話したのが、ひょっとすると彼女を後悔させたのかもしれない。というのも彼女は立ち止まり、私を激しく抱きしめた……彼女が持っていたバラの花と一緒に。そして最後にあのフ

リーダのことを褒めた。「彼女は優雅だったわ。彼女はしっかりしている！」母がその言葉を使うのは非常に稀だったし、女性についてそう述べることは全然なかった。母にもあのフリーダが気に入ったのは嬉しかった。ずっと後になって、私たちがこの訪問について話したとき、母は口癖のようにこう言った。私たちが見たもの一切が、これら豪華なものすべてが本来は母に相応しいものだが、母は自分を訝しく感じながらあの場を立ち去ったのだと。なぜならフリーダを恨むこともなかったし、ほかの女性になら許せないようなことも、フリーダには嫉妬することなく許せたからだ。

自伝第3部ヴィーン(1913-1916)に移ることにしよう。暴力的ともいえる方法、母親の強制的個人教授法で習得した新しい言葉、ドイツ語を身につけてカネッティはヴィーンの小学校に編入した。

Es war eine große Klasse, mit über 40 Schülern, ich kannte niemanden. Ein kleiner Amerikaner kam am selben Tag wie ich als neuer Schüler und wurde mit mir zugleich geprüft, vorher sprachen wir noch rasch drei Sätze englisch miteinander. Der Lehrer fragte mich, wo ich Deutsch gelernt hatte. Ich sagte, bei meiner Mutter. Wie lange ich es gelernt hätte? Drei Monate. Ich spürte, daß ihm das sonderbar vorkam, statt eines Lehrers bloß eine Mutter, und nur drei Monate! Er schüttelte den Kopf und sagte: „Da wirst du für uns nicht genug können.“ Er diktierte mir einige Sätze, gar nicht viele. Aber die eigentliche Probe, auf die es ihm ankam, war: >Die Glocken läuten<, und gleich danach: >Alle Leute<. Damit, mit >läuten< und >Leute<, wollte er mich zu Fall bringen. Ich kannte aber den Unterschied und schrieb beides ohne zu zögern richtig nieder. Er nahm das Heft in die Hand und schüttelte wieder den Kopf - was wußte er schon vom Lausanner Schreckenunterricht! -, da ich seine Fragen vorher fließend beantwortet hatte, sagte er und es war so ausdruckslos wie alles zuvor: „Ich will es mit dir versuchen.“

それは40名以上の生徒がいる大きなクラスだった。誰も知り合いはいなかった。小さいアメリカ人がひとり、私と同じ日に新入生としてやって来た。そして私と同時にテストを受けた。まだテストを受ける前に、私たちはお互い大急ぎで英語の文章を三つ話した。教師は、私がどこでドイツ語を習ったのかと尋ねた。母

にと私は答えた。期間はどれくらいだね? 3ヶ月。それは教師に奇妙に思えたようだった。教師の代わりに単にひとりの母親に、それもわずか3ヶ月! 彼は頭を振りながら言った、「私たちの所では、それじゃ必ずしも十分とは言えないね」。彼は文章をいくつか私に書き取らせた。大して多くはなかった。しかし彼が問題にした本来の試験は、「鐘が鳴る」(ディ・グロッケン・ロイテン) だった。そしてすぐその後に「すべての人々」(アレ・ロイテ)。「ロイテン」と「ロイテ」で、彼は私を躓かせようとした。しかし私はその違いを知っていたので、躊躇することなく二つとも正しい綴りを書いた。彼はそのノートを手に取り、再び頭を振った……ローザンヌの恐ろしい授業について、彼は何を知っていただろう! ……私が前に彼の質問に流暢に答えていたので、彼は次のように述べたが、以前のすべてと同じく表情のない言葉だった。「まあ君とやってみるとしようか。」

Die Mutter, als ich ihr davon erzählte, war aber nicht erstaunt. Sie hielt es selbstverständlich, daß „ihr Sohn“ nicht nur ebensogut, sondern besser Deutsch können müsse als die Wiener Kinder. Die Volksschule hatte fünf Klassen, sie fand bald heraus, daß man die fünfte überspringen könne, wenn man gute Zeugnisse hatte, und sagte: „Nach der 4. Klasse, das ist in zwei Jahren, kommst du ins Gymnasium, da lernt man Latein, das wird nicht mehr so langweilig für dich sein.“

しかし私が母にそのことを話しても、彼女は驚かなかった。「彼女の息子」はただ同じようにできるだけでなく、ヴィーンの子供たちよりずっと素晴らしいドイツ語ができねばならぬというのを、当然と見なしていた。小学校は5学年あった。彼女は間もなく、成績が良ければ5年生を飛び級できることを発見し、こう言った。「2年間で4年生が終わるけれど、その後おまえはギムナージウムへ行ける。そこではラテン語を学ぶから、おまえが退屈することはもうないでしょう。」

母親との読書の夕べは、カネッティの将来と文学的生活にとって大きな意味を持ち、さまざまな局面で多大な影響を及ぼすことになる。

Anhand der abenteuerlichsten Entdeckungsreisen lernte ich die Erde und ihre Völker kennen. Was der Vater begon-

nen hatte, setzte die Mutter auf diese Weise fort. Als sie sah, daß die Forschungsreisen alle anderen Interessen bei mir verdrängten, kam sie zur Literatur zurück, und um sie mir schmackhaft zu machen und damit ich nicht bloß läse, was ich nicht verstünde, begann sie mit mir Schiller auf deutsch und Shakespeare auf englisch zu lesen.

もっとも冒険的な発見の旅によって、私は地球とその民族について知った。父が始めていたことを、母がこのような方法で継続した。探検旅行が私のほかの興味をすべて駆逐するのを見て、母は文学に引き返した。そして私に文学への興味を起こさせるために、また理解できないものを単に読まないように、私と一緒にシラーをドイツ語で、シェークスピアを英語で読み始めた。

So kam sie zu ihrer alten Liebe zurück, zum Theater, und so hielt sie auch die Erinnerung an den Vater wach, mit dem sie früher immer über diese Dinge gesprochen hatte. Sie bemühte sich, mich nicht zu beeinflussen. Nach jeder Szene wollte sie wissen, wie ich sie verstanden hätte, und bevor sie selbst etwas sagte, kam immer ich zu Wort. Aber manchmal, wenn es spät wurde und sie die Zeit vergaß, lasen wir weiter und weiter, ich spürte, daß sie in Begeisterung geriet und nun nicht aufhören würde. Ein wenig hing es auch von mir ab, ob es so weit kam. Je verständiger ich reagierte, je mehr ich zu sagen fand, um so kräftiger stiegen die alten Erlebnisse in ihr auf. Sobald sie von einer jener Begeisterungen zu sprechen begann, die zum innersten Inhalt ihres Lebens geworden waren, wußte ich, daß es noch lange dauern würde; es war dann nicht mehr wichtig, daß ich schlafen ging, sie selber konnte sich so wenig von mir trennen wie ich von ihr, sie sprach dann zu mir wie zu einem erwachsenen Menschen, lobte überschwenglich einen Schauspieler in einer bestimmten Rolle, kritisierte auch etwa einen anderen, der sie enttäuscht hatte, aber das kam seltener vor. Am liebsten sprach sie von dem, was sie ohne Widerstand und mit vollkommener Hingabe aufgenommen hatte. Die Nasenflügel an ihren weiten Nüstern gerieten in heftige Bewegung, ihre großen, grauen Augen sahen nicht mehr mich, ihre Worte waren nicht mehr an mich gerichtet. Ich fühlte, daß sie zum Vater sprach, wenn sie auf diese Weise ergriffen war, und vielleicht wurde ich dann selbst, ohne es zu ahnen, zu meinem Vater. Ich ernüchterte sie nicht durch kindliche Fragen und verstand es,

ihre Begeisterung zu schüren. (Das Erdbeben von Messina. Burgtheater zu Hause)

そこで彼女は彼女の昔の愛、つまり劇場に引き返した。それで父の記憶も生き返らせた。以前はいつも父とこのことを話題にしていたのである。彼女は私に影響を及ぼさぬよう努力した。それぞれの場面の後、私がそれをどう理解したのかを知りたがった。彼女自身が何か言う前に、いつも私が言葉を出した。だが時に遅い時刻になり彼女が時間を忘れて、私たちは先へ先へと読み進んだ。彼女は夢中になり、今や中止しないだろうと私は感じた。このように先へ進むかどうかは、少々私次第でもあった。私の反応が物わかり良ければいいほど、私は語ることがますます多く見つかり、彼女の古い体験が一層力強く浮かび上がった。彼女が、人生のもっとも内面的な中味となっていた色々な感激のひとつを語り始めるや、話はまだ長時間続くだろうと思えた。そのとき、もはや私が眠ることは重要でなかった。彼女自身、私が彼女から離れられないように、私から離れることはできなかった。そうして彼女は、まるで成人した大人に話すように私に話した。感極まりながら、ある決まった役を演ずる一人の俳優を称賛し、たまに失望させられた別の俳優を非難することもあったが、しかしそれはほんの稀なことだった。抵抗なく、完全な献身とともに受け取っていたものを語るの、彼女は一番好きだった。彼女の広い鼻孔の小鼻は激しく揺れ動いた。大きな灰色の目はもはや私を見なかったし、彼女の言葉はもう私に向けられなかった。彼女がこんな風に感動しているとき、父に話しかけているのだと、私には感じられた。ひょっとするとそんな時、私自身が知らないうちに私の父になっていたのかもしれない。私は子供じみた質問で彼女を興ざめさせなかったし、彼女の感激を呼び起こす術を心得ていた。

シェークスピアの作品に登場する人物の中で、母親がもっとも好んだのはコリオラン (Coriolan) だった。彼はどのような人物なのか? 悲劇『コリオラヌス』(Coriolanus) の要約をマイケル・J・カミングスに従って読んでみよう。

(The Complete Shakespeare. November 2001. Plot Summaries, Complete Works, Biography, Criticism, Sonnet Analysis, Quotations, Study Guides, Links. An American Site Recommended by the BBC and the UK SchoolsNet. Maintained as a public service by Michael. J. Cummings, a

freelance writer in Williamsport, PA, USA) © 1999

When famine sweeps Rome, the citizens believe the rulers are to blame. The patrician warrior Caius Martius, later to be known as Coriolanus, despises the whining rabble as a drain on the public trough and threatens to wield his sword against them. However, the Senate throws the people a political crumb: They may select five tribunes to represent them. The concession angers Martius. However, his attention quickly shifts to new villains when he learns an Italian tribe known as the Volscians plans an attack on Rome. It is wonderful news to Martius. As a soldier, he likes nothing better than a good war to test his talents. It is good news, too, for his mother, Volumnia. She reared her son to be a stalwart soldier who brings honor to Rome, himself and his family. Now that an opportunity for glory has presented itself, she wants her son to take advantage of it. Marcius' wife, Virgilia, is not at all like her husband or his mother; she is a gentle creature who hates bloodshed.

飢饉がローマを襲ったとき、市民は為政者に責任があると思った。愛国的戦士カイウス・マルチウスは、後にコリオラヌスとして知られるようになるが、困窮時の捌け口として泣き言を並べ立てる烏合の衆を蔑み、剣を振るって彼らを威嚇する。しかし元老院は大衆に政治的「アメ」を与える。平民は5人の護民官を代表として選べるという「アメ」を。この譲歩はマルチウスを怒らせる。しかしヴォルシア族として知られるイタリア部族にローマ攻撃の計画があると聞くや、彼の関心はすぐさまこの新しい敵に向かう。それはマルチウスにとって素晴らしい知らせだった。兵士としての力を試す打ってつけの戦いを、彼は何よりも望んでいた。彼の母ヴォルムニアにとっても良い知らせだった。彼女は息子を、ローマに、そして彼自身と家族に栄光をもたらす勇敢な兵士となるべく育てあげた。今や栄光の機会が到来し、彼女はこの好機を息子に利用して欲しいと願う。マルチウスの妻ヴァージリアは夫や義母とは違い、流血を憎むおとなしい人物である。

After Marcius marches off to attack the Volscian city of Corioli, Virgilia cannot go about business as usual like other Roman women. Instead, she can only sit at home and fret for her husband's safety. When the Volscians turn the tide of battle against the Romans, Marcius alone continues to attack. Heartened by his bravery and resolve, the fleeing

Romans halt their retreat, then storm and take the city. Marcius, bleeding, then rides off to lead an attack against Volscians outside the city, and he again wins the day. The Volscians are defeated. For his stunning feats on the battlefield, his fellow soldiers give him a title, "Corionlanus," conqueror of Corioli. When he returns to Rome in triumph, his mother greets him, proud that he has suffered wounds proving his mettle. His wife is also there, weeping for joy that he has survived the battle. To his mother's delight, the Senate nominates him to be consul.

マルチウスがヴォルシア族の町コリオリ攻撃に進軍すると、ヴァージリアは他のローマ婦人たちと違い、日常の仕事が手につかなくなる。彼女は家に籠もり夫の無事を願って苦悩する。ヴォルシア族に対するローマ軍の戦いが不利になっても、マルチウスだけは怯まず攻撃を続ける。彼の勇敢さと決意に心を奮い立たされ、敗走中のローマ軍は撤退をやめ、攻勢に転じコリオリを攻略する。マルチウスは傷つきながらもさらに馬を進め、ヴォルシア族を町の外へ追い払い、その日の戦いに勝利を収める。ヴォルシア族は敗北する。戦場での驚嘆すべき武勲に対して、同僚の兵士たちはマルチウスに「コリオラヌス」(コリオリの征服者)という称号を与える。彼がローマに凱旋すると、母が迎え、息子が勇気を証する傷を負ったことを誇りにする。妻もその場に居合わせ、夫が戦いを生き延びた喜びで涙を流す。元老院はマルチウスを執政官に任命し、母親は大いに喜ぶ。

However, if he is to win the office, he must follow custom and go to the Forum to ask the common people directly for their backing. With the greatest reluctance, the proud warrior agrees to humble himself before the rabble he despises to beg for votes. Out of gratitude for his service to Rome, the people approve him as consul-elect. Meanwhile, two of the tribunes elected to represent the people--Sicinius and Brutus--persuade the people that they have made a bad choice. The august Coriolanus, the tribunes say, does not have the people's interests at heart; he will only rob them of their liberties. The people then decide to recant; Coriolanus shall not be consul after all. Enraged, Coriolanus condemns the fickle mob, suspecting they seek to undermine authority and destroy the state. In return, the tribunes accuse Coriolanus of treason. When Coriolanus draws a sword, his friends hie him away to prevent further up-

heaval.

しかしながら、もし彼が執政官の職務を手に入れるには、慣習に従って公会堂へ行き、平民たちに直接その支持を乞わねばならない。誇り高い戦士マルチウスは大いに躊躇うが、軽蔑する大衆の前に身をかがめ支持を乞うことに同意する。ローマへの偉大な貢献に感謝し、大衆は彼を執政官候補として承認する。一方、平民を代表する護民官のうちの2人、シシニウスとブルータスは、大衆を説得して間違った選択だと述べる。尊大なコリオラヌスには大衆の利益など眼中にない、彼はただ大衆から権利を奪うばかりだと。そこで人々は考え直すことを決心する。結局コリオラヌスは執政官になるべきではないと。激怒したコリオラヌスは移り気な大衆を非難し、彼らは権威をくつがえし国を滅ぼそうとしていると疑う。これに対し、護民官たちはコリオラヌスを反逆罪で告訴する。コリオラヌスが剣を抜くと、友人たちはさらに混乱することを避けて、彼を急ぎ足で連れ去る。

Menenius Agrippa, an old friend of Coriolanus, then intervenes on the great soldier's behalf, proposing a peace-making meeting at the Forum. The tribunes agree to attend the meeting. The contentious Coriolanus, however, refuses to participate. His mother, Volumnia, then speaks in favor of the meeting, advising Coriolanus that everyone must compromise from time to time. What motivates her is not conciliation; it is ambition. She wants her son to become consul. The friends of Coriolanus also importune him to attend the meeting—for the sake of Rome. After being much plied with silver tongues, Coriolanus agrees to the meeting. All is well. But not for long. The tribunes renew their accusations and fan the flames of the smoldering feud. When Coriolanus loses his temper, he is banished from Rome. Outside the city gates, he bids farewell to his wife, his mother and friends, then bends his mind toward one goal: revenge not only against the tribunes, but all of Rome.

そこでコリオラヌスの旧友メネニウス・アグリッパは、偉大な兵士の代理として、公会堂で和解の集会を開くよう仲介の労をとる。護民官たちは出席に同意する。しかし異論のあるコリオラヌスは参加を拒否する。すると母ヴォルムニアは集会に賛成の意を表し、息子に、誰でも時には譲歩しなければならないと忠告する。彼女がこう述べたのは和解のためではなく、野心からだ。彼女は息子を執政官にすることを望んだので

ある。友人たちもコリオラヌスに集会への出席を頻りに勧めた……ローマのために。雄弁な舌に説得され、彼は集会出席に同意する。すべては順調にいくが、長くは続かない。護民官たちは新たな非難を述べ立て、くすぶる敵意の炎を煽る。コリオラヌスの堪忍袋の緒が切れ、彼はローマから追放される。ローマの門の外で、妻、母親や友人たちに別れを告げ、その時、彼は一つの目標を心に誓う。護民官たちに対してばかりでなく、ローマのすべてに復讐するという目標を。

After Coriolanus finds his way to the camp of the defeated Volscians, who are planning a new attack on Rome, the Volscian leader, Aufidius, sympathizes with Coriolanus. Coriolanus, after all, is a soldier like Aufidius; and brave soldiers should not be treated with ingratitude and ridicule. But when the Volscian regulars receive Coriolanus as a great warrior—a man deserving of trust, admiration and love—Aufidius has second thoughts about his guest. Aufidius and Coriolanus then march on Rome as co-commanders. Fear grips all of Rome, and the citizens wish they had not been so harsh in judging Coriolanus. When his old Roman friends go to his camp to plead for mercy, he refuses to listen to their entreaties. Then his mother, wife and little boy go out to his camp to soften his heart. His domineering mother even kneels before him as she presents her case.

コリオラヌスが、敗北したヴォルシア族の陣地へ進んでいくと、彼らはローマへの新たな攻撃を計画中だった。ヴォルシア族の指導者アウフィディウスはコリオラヌスに同情する。結局は自分と同様、一人の兵士であるし、勇敢な兵士は忘恩と嘲笑で扱われるべきではないと。しかしヴォルシア族の正規兵たちが、コリオラヌスを偉大な戦士……信頼、賞賛、愛情に値する人物……として受け入れると、アウフィディウスは彼の客について考え直す。アウフィディウスとコリオラヌスは司令官として肩を並べローマに進軍する。恐怖がローマ全体を包囲し、市民たちはコリオラヌスを厳しく裁いた事を悔いる。ローマの旧友たちが陣地を訪ね慈悲を乞うが、彼は懇願に耳を貸すことを拒む。次いで母親、妻や幼い息子が彼を宥めに陣地へ出向く。誇り高い母親は、彼の前に跪きさえて願いを述べる。

Coriolanus, torn between his love for his family and his sworn duty to the Volscian army, decides to promote a

peace treaty. Coriolanus and the Volscians then withdraw to Corioli. The Roman citizens rejoice, and they hail Volturnia as the savior of the city. At Corioli, Aufidius cannot brook the popularity that Coriolanus enjoys with his troops, so he brands Coriolanus a traitor who has robbed the Volscians of a victory over Rome. Henchmen of Aufidius then surround and kill Coriolanus. But in his death, Coriolanus wins another victory: Aufidius, realizing that he has taken the life of a most noble and worthy friend and adversary, vows to honor the memory of Coriolanus. He says, "My rage is gone; and I am struck with sorrow." Coriolanus is to be given a dignified burial, and he is to be remembered as a man of greatness whose legend will live on in Rome.

家族への愛とヴォルシア軍に誓った義務の間で心を裂かれ、コリオラヌスは和平条約締結促進を決意する。そこでコリオラヌスとヴォルシア軍はコリオリへ退却する。ローマ市民は喜びにわき、ヴォルムニアを町の救世主として讃える。コリオリでアウフィディウスは、軍隊でのコリオラヌスの人気を許せず、ローマにたいするヴォルシア軍の勝利を奪った反逆者の汚名を彼に着せる。そこでアウフィディウスの部下がコリオラヌスを取り囲み、殺害する。しかし死に際し、コリオラヌスはもう一つの勝利を獲得する。すなわちアウフィディウスは、もっとも高貴で価値ある友人、また敵でもあった人物の命を奪ったことに気付き、コリオラヌスの名声を讃えることを誓う。「私の怒りは過ぎ去った。そして私は悲嘆に暮れている」と、彼は述べる。コリオラヌスの埋葬は荘厳に執り行われるべきである。そしてローマで、その伝説が語り継がれる偉大な人物として記憶されねばならぬと。

カネッティの母親が何故にコリオラヌスを好んだか、上の文章から浮かび上がるこの悲劇的な人物像は、母親の強い性格と彼女自身の出自に大きく関係するであろう。カネッティがすでに何度も述べているように、家系と出自に対する強烈的な矜持の念が、母親から消え去ることは生涯決してなかった。何故そうだったかについては立派な理由があるが、母方の家系について述べるのは別の機会に譲りたい。カネッティ自身が父方や母方の家系について述べることは、意図的に忌避しているからである。先祖の系図を細かく辿り、「よい家柄」について語ることは当面の問題ではないからである。いずれにしろ15、16世紀にスペインやポルトガルから追放されたユダヤ人セファルディム

(Sephardim)の子孫として、ユセフ・イシャグプールも述べているように、コリオラヌスの不屈の意志、自由な判断力、自尊心は、女性であるにもかかわらず母親の理想像だったのである。

祖父のカネッティはヴィーンの彼らの家をよく訪問したが、最後は決まったようにカネッティの母との口喧嘩に終始した。おまえたちがルスチュックにとどまっていれば、彼はまだ生きていただろう。イギリスの気候に殺されたのだ。あなたが静かに彼をルスチュックから去らせておけば、イギリスの気候に馴染めたでしょう。しかしあなたは彼を呪った。父親が息子を、自分の息子を呪詛するなんてどこにあるでしょうと、母親は応じる。この祖父は「疲れを知らぬ人間」だった。

Er suchte zu allen Menschen in ihrer Sprache zu sprechen, und da er diese nur nebenher auf seinen Reisen gelernt hatte, waren seine Kenntnisse, mit Ausnahme der Sprachen des Balkans, zu denen auch sein Spanisch gehörte, höchst mangelhaft. Er zählte gern an den Fingern auf, wieviel Sprachen er spreche, und die drollige Sicherheit, mit der er es bei dieser Aufzählung - Gott weiß wie - manchmal auf 17, manchmal auf 19 Sprachen brachte, war trotz seiner komischen Aussprache für die meisten Menschen unwiderstehlich. Ich schämte mich dieser Szenen, wenn sie sich vor mir abspielten, denn was er da von sich gab, war so fehlerhaft, daß er selbst in meiner Volksschule beim Herrn Lehrer Tegel damit durchgefallen wäre, wie erst bei uns zu Hause, wo die Mutter uns mit erbarmungslosem Hohn den kleinsten Fehler verwies. Dafür beschränkten wir uns zu Hause auf bloß vier Sprachen, und wenn ich die Mutter fragte, ob es möglich sei, 17 Sprachen zu sprechen, sagte sie, ohne den Großvater zu nennen: „Nein! Dann kann man keine!“

彼はあらゆる人間に対して、その人の言葉で話そうと努めていた。これらの言葉は旅行中ただ片手間に習得したものだったから、その知識は、彼のスペイン語も属するバルカンの幾つかの言葉は例外としても、きわめて不十分だった。彼はいくつの言葉を話せるか、指で数え上げるのが好きだった。しかも茶目っ気たっぷりの自信で数え上げた……いくつかなぞ誰にわかろう……あるときは17、あるときは19の言葉だったが、彼の滑稽な発音にもかかわらず、この自信は大抵の

人々に拒みようのないものだった。この場面が目の前で演じられると、私にはそれが恥ずかしかった。というのもその場の出し物は欠陥だらけで、私の小学校のテーゲル先生のもとでなら彼自身落第していただろう。ちょうど私たちの家で、母が情け容赦もなく嘲笑しながら、私たちのちょっとしたミスを初めて叱ったように。そのため私たちは、家では単に4つの言葉に限った。私が17の言葉を話すのは可能かどうかと母に尋ねたとき、彼女は祖父の名前を挙げずにこう言った。「いいえ！ そうだとしたらひとつもできないのよ！」

Seine Neugier, wie ich schon sagte, war immer rege, nie, kein einziges Mal, habe ich ihn müde gesehen, und selbst wenn ich mit ihm allein war, spürte ich, daß er mich unaufhörlich, ohne einen Augenblick auszusetzen, beobachtete. In jenen Nächten, die ich im Hotel Austria bei ihm verbrachte, war mein letzter Gedanke vor dem Einschlafen der, daß er nicht wirklich schlief, und so wenig glaubwürdig es klingen mag, ich habe ihn zu keiner Zeit schlafen gesehen. Morgens war er lange vor mir wach, gewaschen und angezogen, und meist hatte er auch sein Morgengebet verrichtet, das ziemlich lange dauerte. Wachte ich aber nachts aus irgendeinem Grund auf, so saß er aufgerichtet in seinem Bett, als habe er schon lange gewußt, daß ich jetzt aufwachen würde, und warte nur darauf, daß ich ihm sage, was ich jetzt wolle. Doch gehörte er nicht etwa zu den Leuten, die über Schlaflosigkeit klagen. Im Gegenteil, er wirkte frisch und für alles bereit, ein Teufel an immerwacher Bereitschaft, vielen war er durch dieses Übermaß an Vitalität - bei allem Respekt, den sie vor ihm hatten - ein wenig unheimlich.

彼の好奇心は、私がすでに述べたように、いつも活発だった。決して、私は一度として疲れた彼を見たことがない。私が彼一人といるときでさえ、絶えず、一瞬も途切れることなく、彼が私を観察しているのを感じた。私がオーストリア・ホテルの彼のもとで過ごしたあの幾夜かに、寝込む前の最後の私の考えは、彼が本当は寝ていないのではないかということだった。とても信じ難く響くかもしれないが、私はどんなときにも彼が寝ている姿を見たことはなかった。朝には私よりずっと前に目を覚まし、洗顔し服を着ていた。そして大抵、かなり長く続く朝の祈りも捧げていた。しかし夜中、私が何かの理由で目覚めると、体を起こしベッドに座っていた。まるで私が今、目覚めるのがすでに

以前からわかっていたかのように。そして私が今何をしたいのか、彼に告げるのをただ待ち受けている。だが彼は、例えば不眠を嘆く人々のひとりではなかった。反対に、彼は澁刺と活動し、あらゆることに準備を整えていた。いつも準備に目覚めた悪魔だった。彼はこの過剰な活力によって……人々が彼に対して抱くあらゆる尊敬の点でも……多くの人々に少しばかり不気味だった。

カネッティへの母親の精神的文化的影響は測り知れないものであり、次はそのことを率直に述べた下りである。

Das unvergleichlich Wichtigste, das Aufregende und Besondere dieser Zeit waren die Leseabende mit der Mutter und die Gespräche, die sich an jeder Lektüre knüpften. Ich kann diese Gespräche nicht mehr im einzelnen wiedergeben, denn ich bestehe zum guten Teil aus ihnen. Wenn es eine geistige Substanz gibt, die man in frühen Jahren empfängt, auf die man sich immer bezieht, von der man nie loskommt, so war es diese. Ich war von blinden Vertrauen zur Mutter erfüllt, die Figuren, über die sie mich befragte, über die sie dann zu mir sprach, sind so sehr zu meiner Welt geworden, daß ich sie nicht mehr auseinandernehmen kann. Alle späteren Einflüsse kann ich in jeder Einzelheit verfolgen. Diese aber bilden eine Einheit von unzerteilbarer Dichte. Seit dieser Zeit, also seit meinem zehnten Lebensjahr, ist es eine Art Glaubenssatz von mir, daß ich aus diesen vielen Personen bestehe, deren ich mir keineswegs bewußt bin. Ich denke, sie bestimmen, was mich an Menschen, denen ich begegne, anzieht oder abstößt. Sie waren das Brot und das Salz der frühen Jahre. Sie sind das eigentliche, das verborgene Leben meines Geistes. (Der Unermüdliche)

このころの何ものとも比較できぬ重要な、刺激的で特別なことは、母との読書の夕べと読んだ色々な本と結びつく会話だった。私はもはやこれらの会話のひとつひとつを再現することはできない。それというのも、私の一部の良いところはこれらの会話から成り立っているからである。早い時期に受け取り、いつも関係し、そこから決して離れぬ精神的実体ももし存在するとすれば、それはこれらの会話だった。私は母への盲目的信頼に満たされていた。彼女が私に質問し、その後で私に語った人物たちは、私の世界になりきっている。

だから私はもはや彼らを分解することはできない。後々のすべての影響なら、私はどれもひとつひとつ追跡できる。しかしこれらの人物は、分割できぬ稠密な統一体を形成している。この時以来、だから10歳足らずの時以来、私は決して自分で意識しないこういう多くの人物から成り立っているというのが、私の一種の信仰命題なのである。これらの人物が、私が出会う人間たちにおいて、何によって私が魅惑され反感を感じるかを規定しているのだと思われる。彼らは早い時期のパンと塩だった。彼らは私の精神の本来的な、隠された生命である。

戦争の突発は3歳、5歳、9歳のカネッティ3人兄弟に、奇妙な形で、敵意ある群衆の素顔を見せた。

An einem Tage, ich glaube, es war der 1. August, begannen die Kriegserklärungen. Carrot dirigierte, die Kurkapelle spielte, jemand reichte Carrot einen Zettel hinauf, den er öffnete, er unterbrach die Musik, klopfte kräftig mit dem Taktstock auf und las laut vor: „Deutschland hat Rußland den Krieg erklärt.“ Die Kapelle stimmte die österreichische Kaiserhymne an, alle standen, auch die, die auf den Bänken gesessen waren, erhoben sich und sangen mit: „Gott erhalte, Gott beschütze unsern Kaiser, unser Land.“ Ich kannte die Hymne von der Schule her und sang etwas zögernd mit. Kaum war sie zu Ende, folgte die deutsche Hymne: >Heil dir im Siegerkranz.< Es war, was mir, mit anderen Worten, von England als >God save the King< vertraut war. Ich spürte, daß es eigentlich gegen England ging. Ich weiß nicht, ob es aus alter Gewohnheit war, vielleicht war es auch aus Trotz, ich sang, so laut ich konnte, die englischen Worte mit und meine kleinen Brüder, in ihrer Ahnungslosigkeit, taten mir's mit ihren dünnen Stimmchen nach. Da wir dicht gedrängt unter all den Leuten standen, war es unüberhörbar. Plötzlich sah ich wutverzerrte Gesichter um mich, und Arme und Hände, die auf mich loschlugen. Selbst meine Brüder, auch der Kleinste, Georg, bekamen etwas von den Schlägen ab, die mir, dem Neunjährigen, gelten. Bevor die Mutter, die ein wenig von uns weggedrängt worden war, es gewahr wurde, schlugen alle durcheinander auf uns los. Aber was mich viel mehr beeindruckte, waren die haßverzerrten Gesichter. Irgend jemand muß es der Mutter gesagt haben, denn sie rief sehr laut: „Aber es sind doch Kinder!“ Sie drängte sich zu uns vor,

packte uns alle drei zusammen und redete zornig auf die Leute ein, die ihr gar nichts taten, da sie wie eine Wienerin sprach, und uns schließlich sogar aus dem schlimmen Gedränge hinausließen. (Ausbruch des Krieges)

ある日のこと、8月1日だったと思うが、宣戦布告が始まった。キャロットの指揮で、保養地の楽団が演奏していた。誰かが舞台のキャロットに紙切れを一枚渡した。彼はそれを開くと、音楽を中断し、指揮棒で力強くこつこつと叩き大きな声で読み上げた。「ドイツがロシアに戦線布告しました。」楽団はオーストリアの皇帝讃歌を演奏し始めた。みんな立っていたが、ベンチに座っていた者も立ち上がり、「神よ守りたまえ、神よ我らの皇帝を、我らの国を保護したまえ」を一緒に歌った。私はこの讃歌を学校で知っていた。そこで少し躊躇しながら一緒に歌った。これが終わるや、ドイツの讃歌「勝利者の王冠戴く汝に恙なきことを」が続いた。それは別の言葉で、イギリスの「神が国王を守りたまわんことを」として私が親しんでいたものだった。ことは本来イギリスに対する敵意から起きたことが感じられた。それは古い習慣からだったかどうかはわからぬし、ひょっとすると反抗心からだったかもしれないが、私はできるだけ大声で英語の歌詞と一緒に歌った。私の弟たちも何も予想せず、細いかわいい声で私に従った。私たちは密集した人々の中に立っていたので、それが聞き逃がされることはあり得なかった。突然、怒りに歪んだ顔が私の周囲に見えた。それから腕や手が私に殴りかかった。私の弟たちすら、一番小さいゲオルクも何度か叩かれた。9歳の私が叩かれるべき筈だったが、私たちから少し離れた密集の母がそれに気づく前に、誰もが入り乱れて私たちに殴りかかった。しかしそれ以上の深い印象を私に与えたのは、憎しみに歪んだ顔だった。どこかの誰かがその事態を母に言ったに違いない。というのも彼女は「だけども子供じゃありませんか！」と大声で叫んだのだから。彼女は強引に突き進み、私たちのもとへやってきた。そして私たち3人を皆一緒に抱え込み、怒りながら人々を説得した。母がヴィーン女性のように話したので、彼らは母にはまったく何もしなかった。そして結局、私たちを厭わしい群衆から外へ連れ出しさえた。

10歳のとき母からプレゼントされたのが、シュヴァープの「古代ギリシャ・ローマ伝説」だった。アルゴナウテース(巨船アルゴーに乗り組んだ船人た

ち) 物語に登場するメディア王女と母親の同一視はなぜ生じたのか? またオデッセウスがカネッティにどれほどの影響を与えたのだろうか。

Es dauerte nicht sehr lange und ich kam an die Argonautensage. Medea ergriff mich mit einer Gewalt, die ich nicht ganz verstehe, und noch weniger, daß ich sie der Mutter gleichsetzte. War es die Leidenschaft, die ich in ihr fühlte, wenn sie von den großen Heroinnen des Burgtheaters sprach? War es die Furchtbarkeit des Todes, den ich dunkel als Mord empfand? Ihre wilden Dialoge mit dem Großvater, in die jeder seiner Besuche mündete, ließen sie geschwächt und weinend zurück. Zwar lief er davon, als fühle er sich geschlagen, sein Zorn war ohnmächtig, nicht der eines Siegers, aber auch sie vermochte diesen Kampf nicht zu bestehen, sie geriet in eine hilflose Verzweiflung, die peinigend war, die ich an ihr nicht ertrug. So ist es sehr wohl möglich, daß ich ihr überirdische Kräfte, die einer Zauberin, wünschte. Es ist eine Vermutung, die sich mir jetzt erst aufdrängt: als die Stärkere wollte ich sie sehen, als die Stärkste überhaupt, eine unbezwingliche und unablenkbare Kraft.

大して長く経たないうちに、私はアルゴナウテース伝説にたどり着いた。メディアが、私にはとても理解できない力で私を捕らえた。そしてメディアを母と同一視したのは、もっと理解できないことだった。母がブルク劇場の偉大なヒロインたちについて語る時、私が彼女に感じたものは情熱だったのか? それは、私がおぼろげに殺人と感じた死の恐怖だったのか? 祖父の訪問のたびに、最後に行き着く彼女の荒々しい祖父との対話は、弱々しく涙に暮れる彼女をあとに残した。なるほど祖父は、打ち負かされたようにその場を駆け去った。彼の怒りは無力で、勝利者の怒りではなかった。しかし彼女もこの戦いに耐えることはできなかった。痛々しく、救いようのない絶望に陥ったし、母のその姿を見るのは私には耐え難かった。そんなわけで、私が彼女に超地上的な力、魔術的女の力を願ったのはおそらく大いにあり得るだろう。今となってようやく私の胸に浮かび上がる推測はこうである。きわめて強い女として、私は彼女を見たかった。最も強い女性一般として、征服できぬ、転向不可能な力として。

So wurde Odysseus, in den damals alles Griechische für mich mündete, zu einem eigentümlichen Vorbild, das erste,

das ich rein zu erfassen vermag, das erste, von dem ich mehr erfuhr als je von einem Menschen, ein rundes und sehr erfülltes Vorbild, das sich in vielen Verwandlung präsentierte, deren jede ihren Sinn und ihre Stelle hatte. In allen Einzelheiten hat er sich mir einverleibt und mit dem Fortschritt der Zeit gab es nichts an ihm, das mir nicht von Bedeutung wurde. Den Jahren seiner Fahrten entsprach die Zahl der Jahre, während derer er auf mich einwirkte. Zuletzt ging er, für niemand erkennbar, ganz in die >Blendung< ein, womit nicht mehr als eine innerste Abhängigkeit von ihm gemeint ist. So vollkommen diese war und so leicht es für mich heute wäre, sie in allen Details nachzuweisen - ich weiß auch sehr wohl noch, womit seine Einwirkung auf den Zehnjährigen einsetzte, was diesen als Neues zuerst erfaßte und beunruhigte. (Medea und Odysseus)

そこでオデッセウスは、私にとって当時ギリシヤ的なものの一切が彼へと注ぎ込んだが、本来的な模範となった。私が純粹に把握できた最初の模範、かつて人間について経験した以上の最初の模範、多くの変身の形で立ち現れる完全で、大いなる実現の模範だった。変身のそれぞれが意味と場所を持っていた。あらゆる細部に渡って、彼は私と一体化した。そして時間の進展とともに、オデッセウスに関して私に重要ならざるものは何もなくなくなった。彼の足跡の年月に応じているのが、彼が私に及ぼした影響の年月の数である。最後に彼は、誰にも知られず、すっかり「眩暈」の中へ入り込んだ。こう言っても、もっとも内面的な彼への従属以上のことは意味していない。この従属は完全なものだったし、私にとって今日、あらゆる詳細な点でその証明はとても容易なことに見える……またさらに、どんな点で彼の影響が10歳の少年に植え込まれ、何が新しいものとして当時の私をまず捕らえ不安にさせたかも、おそらく私にはわかっているのである。

1915年の夏、母親の希望で彼らはブルガリアのルスチュックへ旅行する。その地は、彼女が幼年時代の7年間を幸福に過ごした場所でもあった。伯母夫妻や母のもっとも古い友人オルガにも会った。

„Jetzt verstehst du, warum ich auf Russen nichts kommen lasse“, sagte sie, „es sind die wunderbarsten Menschen. Die Olga liest jeden freien Augenblick. Mit ihr kann man reden.“ „Und mit ihrem Mann?“ „Mit ihm auch. Aber sie ist

gescheiter. Sie kennt ihre Literatur besser. Das respektiert er. Am liebsten hört er ihr zu.“

Ich sagte dazu nichts, aber ich hatte so meine Zweifel. Ich wußte, daß mein Vater die Mutter für gescheiter gehalten und weit über sich gestellt hatte, und ich wußte auch, daß sie das akzeptierte. Sie war wie selbstverständlich seiner Meinung und wenn sie über ihn sprach — sie sagte immer die schönsten Dinge —, erwähnte sie auch ganz naiv, wieviel er von ihrem Geist gehalten hatte. „Dafür war er musikalischer als du“, pflegte ich dann einzuwenden. „Das schon“, sagte sie. „Er hat auch besser Theater gespielt als du, das sagen alle Leute, er war der beste Schauspieler.“ „Schon, schon, er hatte eine Naturbegabung dafür, die hat er vom Großvater geerbt.“ „Er war auch lustiger als du, viel lustiger.“ Das hörte sie nicht ungerne, denn sie hielt auf Ernst und Würde und die pathetischen Töne des Burgtheaters waren ihr in Fleisch und Blut übergegangen. Dann kam immer mein Clou. „Er hatte auch ein besseres Herz. Er war der beste Mensch auf der Welt.“ Da gab es nicht Zweifel noch Zögern, da stimmte sie begeistert ein. „Einen Menschen, der so gut ist, wie er es war, wirst du nie auf der Welt finden, niemals, nie!“

「なぜ私が黙ってロシア人の悪口を言わせておかないか、今ならおまえにもわかるでしょう」と彼女は言った。「彼らはもっとも素晴らしい人間です。あのオルガは、自由な時間にはいつも本を読んでいます。彼女とは話ができます。」「では彼女の夫とは?」「彼とも。しかし彼女の方が聡明です。彼女の方が文学をよく知っています。そのことを彼は尊敬しています。彼は、彼女の言うことに耳を傾けるのが一番好きなのです。」

私はそれに対して何も言わなかった。しかしかなり疑いを抱いた。私は、父が母をより聡明だと見なし、自分の遙か上に位置づけているのを知っていた。それにまた母がそれを受け入れているのも知っていた。彼女は当然のように、父と同じ意見だった。そこで彼女が父について話すときには……彼女は常にもっとも素晴らしいことを述べた……どれほど父が彼女の精神を重要視しているか、素朴極まる口振りで語った。「その代わりに、あなたよりも父には音楽的才能があった」と、そんな時には異議申し立てが私の常だった。「確かにそうだわ」と彼女は言った。「父はあなたより舞台での演技もうまかったと、みんな言います。彼は最良の俳優だった。」「確かに、確かにね、生まれつきの才能があったわ。祖父から受け継いだものだけだ。」

「それにあなたより陽気だったし、ずっと快活だった。」それを聞くのは、彼女の嫌いなことではなかった。というのも、彼女は真面目さと威厳を尊重していたからである。そしてブルク劇場の荘重な響きは、彼女の血と肉となっていた。それからいつも私の泣かせ所がやってきた。「また父にはきわめて善良な心があった。父はこの世で最良の人間だった。」そこには疑いも躊躇もなかった。そこでは彼女は感激しながら同意した。「彼ほど善良だった人間はこの世で決して見つからないでしょう。決して、ひとりとして!」

ブルガリア, ルーマニア, ハンガリーの国境を越えて彼らは帰路につく。

Das Schloß sahen wir nur aus der Ferne. Seit kurzem, seit dem Ende des zweiten Balkankrieges, lag es nicht mehr in Bulgarien und gehörte zu Rumänien. Grenzüberschreitungen im Balkan, wo bittere Kriege geführt worden waren, galten nicht als Vergnügen, an vielen Stellen waren sie gar nicht möglich und man vermied sie. (Reise nach Bulgarien)

われわれはその城を遠方から眺めただけだった。ちょっと前から、第二次バルカン戦争の終結以来、その城はもはやブルガリアにはなくルーマニアの所属だった。酷たらしい戦争が行われていたバルカンで、国境を越えるのは楽しみとは見なされなかった。多くの場所でまったく不可能だったし、人々はそれを避けたのである。

1915年秋、カネッティはレアールギュムナージウム(普通はギリシャ語やラテン語の代わりに近代語または自然科学の学科を強調する中高等学校)に入学する。

„Ich weiß, wie die Kinder kommen“, sagte er plötzlich eines Tages, „meine Mutter hat’s mir gesagt.“ Schiebl war ein Jahr älter als ich, die Frage hatte ihn schon zu beschäftigen begonnen und ich schloß mich widerstrebend seiner Neugier an. „Das ist ganz einfach“, sagte Deutschberger, „so wie der Hahn auf der Henne schustert, so schustert der Mann auf der Frau.“ Ich, von den Shakespeare-respektive Schillerabenden mit der Mutter erfüllt, geriet in Zorn und schrie: „Du lügst! Das ist nicht wahr! Du bist ein Lügner!“ Es war das erste Mal, daß ich mich gegen ihn zur Wehr setzte. Er blieb ganz höhnisch und wiederholte seinen Satz.

Schiebl schwieg und die volle Verachtung Deutschbergers entlud sich über mich. „Deine Mutter sagt dir nichts. Sie behandelt dich wie ein kleines Kind. Hast du noch nie einem Hahn zugeschaut? So wie der Hahn usw. Man kann nicht früh genug lernen, wie es im Leben zugeht, sagt meine Mutter.“

「僕は子供がどんなふうになられるか知っている」と、彼はある日、突然言った。「母がそれを僕に言ったんだ。」シーブルは私より一歳年上だった。すでに彼はその問いに心を奪われ始めていた。私は嫌々、彼の好奇心に従った。「そいつはすごく簡単だ」と、ドイッチェベルガーが言った。「雄鶏が雌鶏の上で靴作りをするように、男が女の上で靴作りをするんだ。」私の心は、母とのシェークスピアあるいはシラーの夕べでいっぱいだったから、怒り心頭に発しこう叫んだ。「おまえは嘘をついている！それは本当じゃない！おまえは嘘つきだ！」私が彼に抵抗したのは、それが最初だった。皮肉な顔つきで、彼はその文章を繰り返した。シーブルは黙り込み、ドイッチェベルガーの軽蔑しきった表情が私に襲いかかった。「おまえの母親はおまえに何も言わないんだ。おまえを小さな子供扱いしている。おまえはまだ一度も雄鶏をしっかりと見たことはないのか？雄鶏が云々。人生でどんなことが起きるか、どんなに早く学んだって早すぎることはない、と僕の母は言っている。」

Es fehlte nicht viel, ich hätte auf ihn losgeschlagen. Ich verließ die beiden und lief über den leeren Bauplatz ins Haus. Wir aßen immer zusammen an einem runden Tisch, ich beherrschte mich vor den kleinen Brüdern und sagte noch nichts, aber ich konnte nichts essen und war dem Weinen nahe. Sobald es nur ging, zog ich die Mutter auf den Balkon hinaus, wo wir tagsüber unsere ernstesten Gespräche führten und sagte ihr alles. Sie hatte natürlich längst meine Aufregung bemerkt, aber als sie ihre Ursache erfuhr, verschlug es ihr die Rede. Sie, die auf alles eine runde und klare Antwort wußte, sie, die mir immer das Gefühl gab, daß auch ich Verantwortung für die Erziehung der Kleinen hätte, sie schwieg, zum erstenmal schwieg sie, sie schwieg so lang, daß mir angst und bange wurde. Dann aber sah sie mir in die Augen und mit der Anrede, die ich von unseren großen Augenblicken kannte, sagte sie feierlich: „Mein Sohn, glaubst du deiner Mutter?“ „Ja! Ja!“ „Es ist nicht wahr. Er lügt. Das hat ihm seine Mutter nie gesagt. Kinder

kommen anders, auf eine schöne Weise. Ich werde es dir später sagen. Du willst es jetzt noch gar nicht wissen!“ Ihre Worte nahmen mir auf der Stelle die Lust dazu. Ich wollte es wirklich noch gar nicht wissen. Wenn das andere nur eine Lüge war! Nun wußte ich, daß es eine war - und eine schreckliche Lüge dazu, denn er hatte erfunden, was seine Mutter ihm nie gesagt hatte!

すんでの事に私は彼に殴りかかるところだった。私は二人をあとに残し、誰もいない建築現場を通って家に走り帰った。私たちはいつも一緒に丸テーブルで食事をしたが、小さな弟たちの手前、自制してまだ何も言わなかった。しかし食事ののどを通らず、泣きだしそうになった。こうなればともかく、母をバルコニーに連れ出すしかなかった。そこで私たちは真昼間、真面目な会話をした。そして彼女にすべてを告げた。当然ながら彼女はとっくに私の興奮に気づいていた。しかし興奮の理由がわかったとき、彼女は口が利けなかった。あらゆることにきっぱりとした、明確な答えを知っていた彼女が、弟たちの教育に関して私も責任があるという感情をいつも私に与えていた彼女が、沈黙した。はじめて彼女が沈黙した。長い間沈黙していたので、私は不安な気持ちになった。しかしそれから私の目をじっと見つめ、あの呼びかけ、私たちの偉大な瞬間に出てくる呼びかけで、彼女は厳かに述べた。「私の息子よ、おまえは母の言うことを信じますか?」「ええ！ええ!」「それは本当ではありません。彼は嘘をついています。そんなことを彼の母親は決して言っていません。子供が生を授かるのは、違った素晴らしい方法です。それについてはもっと後になっておまえに言いましょう。今はまだ、おまえはそれについて全然知りたいたとは思わないでしょう!」彼女の言葉は、私の知りたい欲求を即座に取り除いた。私は事実それについてまだ全然知りたいたとは思わなかった。あの別の話が嘘でありさえすれば!今や私にはそれが嘘であることがわかった……しかも恐ろしい嘘だということが。それというのも彼は、彼の母親が決して言わなかったことをでっち上げていたのだから!

1915年から1916年の冬には、戦争の影響が日常生活にも感じられるようになる。感激の面持ちで、歌いながら行軍していった新兵の時代も過ぎ去ろうとしていた。彼らが再び帰還できるかどうかもわからなかった。

Ich hatte noch nie so viele von ihnen in Waggons zusammengepfert gesehen. Es war ein schrecklicher Anblick, weil der Zug stand. Solange wir auch hinstarrten, er bewegte sich nicht von der Stelle. „Wie Vieh“, sagte ich, „so quetscht man sie zusammen und Viehwaggons sind auch dabei.“ „Es sind eben so viele“, sagte Schiebl, sein Abscheu vor ihnen war mit Rücksicht auf mich temperiert, er hätte nichts über die Lippen gebracht, was mich kränken konnte. Aber ich blieb wie festgewurzelt stehen, und während er mit mir stand, fühlte er mein Entsetzen. Niemand winkte uns zu, niemand rief ein Wort, sie wußten, wie ungern man sie empfang und erwarteten kein Wort der Begrüßung. Es waren alles Männer und viele bärtige Alte darunter. „Weißt du“, sagte Schiebl, „unsere Soldaten werden in solchen Waggons an die Front geschickt. Krieg ist Krieg, sagt mein Vater.“ Es war der einzige Satz seines Vaters, den er je vor mir zitierte, und ich wußte, daß er es tat, um mich aus meinem Schrecken zu reißen. Aber es half nichts, ich starrte und starrte und nichts geschah. Ich wollte, daß der Zug sich in Bewegung setze, das Entsetzlichste war, daß der Zug auf der Brücke noch immer stand. „Kommst du nicht?“ sagte Schiebl und zupfte mich am Ärmel. „Magst du jetzt nicht mehr?“ Wir waren auf dem Weg zu ihm, um wieder mit Soldaten zu spielen. (Die Auffindung des Bösen. Festung Wien)

私は車両にあれほど多くの人間が押し込まれているのを、まだ一度も見たことがなかった。列車が停車していたので、それは恐ろしい光景だった。私たちがじっと見つめていても、列車はその場から動かなかった。「家畜のようだ」と私は言った。「一緒にくたで押しつぶされそうになっている。それに家畜運搬車も連結されている。」「本当にいっぱい人間だ」と、シーブルが言った。彼らに対するシーブルの嫌悪感は、私をおもんばかり加減されていた。彼は、私の感情を害するようなことは何も唇に乗せなかったろう。だが私は、しっかり根が生えたように立ち尽くしていた。彼も私と一緒に立っている間、私の驚きを感じていた。私たちに手を振る者は誰もいなかった。誰も一言も叫びはしなかった。彼らは、自分たちがどれほど歓迎されていないかを知っていたし、歓迎の言葉などひとつとして期待していなかった。すべてが男だったし、その中には髭面の多くの老人たちがいた。「いいかい」とシーブルが言った。「僕らの兵隊たちもあんな車両で前線へ送られるんだ。戦争は戦争だと父が言っている。」

それは、彼がかって私の前で引用した父親のたったひとつの文章だった。そして私には、彼が私を恐怖感からもぎ離すためにそう言ったのがわかった。しかしそれは何の役にも立たなかった。私はただひたすら見つめ続けたが、何も起こらなかった。私は列車が動き出すのを願っていた。もっとも恐ろしいことは、列車が橋の上に相変わらず停車していることだった。「君は来ないの？」とシーブルは言って、私の袖を引っ張った。「今はもう来たくないの？」私たちはまた兵隊遊びをするために、彼のところへ行く途中だった。

母の病とその担当医を巡るカネッティの嫉妬心は、既述したように生涯彼を悩ます。暴力的な力で彼を襲う嫉妬心は、彼の本来的な情熱の源泉ともなったが、様々な確信、素晴らしい知識とは何の関係も持ち得ぬ制御しがたいものだった。

Es war die Zeit, als das Brot gelb und schwarz wurde, mit Beimischungen von Mais und anderen, weniger guten Dingen. Man mußte sich anstellen vor den Lebensmittelgeschäften, auch wir Kinder wurden hingeschickt, so kam ein wenig mehr zusammen. Die Mutter begann das Leben schwieriger zu finden. Gegen Ende des Winters kam ihr Zusammenbruch. Ich weiß nicht, was ihre Krankheit damals war, aber sie lag lange Wochen in einem Sanatorium nieder und erholte sich nur langsam. Anfangs durfte ich sie nicht einmal besuchen, doch allmählich wurde es besser und ich fand mich mit Blumen in ihrem Sanatorium auf der Elisabethpromenade ein. Da sah ich dann zum erstenmal ihren Arzt, den Direktor der Anstalt, bei ihr, einen Mann mit einem dichten schwarzen Bart, der medizinische Bücher geschrieben hatte und Dozent an der Wiener Universität war. Er betrachtete mich mit zuckiger Freundlichkeit aus halbgeschlossenen Augen und sagte: „Also das ist ja der große Shakespeare-Kenner! Und Kristalle sammelt er auch. Von dir hab ich schon viel gehört. Deine Mama redet immer über dich. Du bist schon weit für dein Alter.“

そのころはパンが黄色く、また黒くなった時代だった。玉蜀黍や品質のよくないほかの物が混入されていた。食料品店の前に並ばねばならず、私たち子供も並ばせられたが、それで少しよけいに食料が手に入った。母はこの生活がもっと困難になると思い始めていた。冬の終わり頃、彼女は衰弱した。彼女の病気が当時何

だったのか、私にはわからない。しかし彼女は何週間もサナトリウムで病に臥せり、回復具合は遅々としていた。最初の頃は一度も訪問が許されなかった。しかし次第に病状も良くなり、私は花を持ってエリザベートプロムナードのサナトリウムに到着した。その訪問の際、初めて母のもとで、私は担当医の病院長を目にした。濃い黒鬚をはやした男で、医学書を執筆しヴィーン大学の講師だった。彼は甘ったるい親しみを籠めた、半ば閉じた目つきで私を観察するとこう言った。「つまりこちらが例の偉大なシェークスピア通のお方ですね！それに水晶の収集家でもある。君についてはすでに多くのことを聞いています。君のママはいつも君の話ばかりだ。君は年齢よりずっと先に進んでいるんだね。」

Die Mutter hatte zu ihm über mich gesprochen! Er wußte alles über die Sachen, die wir zusammen lasen. Er lobte mich. Die Mutter lobte mich nie. Ich mißtraute seinem Bart und wich ihm aus. Ich fürchtete, er könne mich einmal mit dem Bart streifen und dann würde ich mich auf der Stelle in einen Sklaven verwandeln, der ihm alles zutragen mußte. Der Ton seiner Stimme, die ein wenig durch die Nase ging, war wie von Lebertran. Er wollte mir die Hand auf den Kopf legen, vielleicht um mich mit ihr zu loben. Aber ich wich ihr aus, indem ich mich blitzrasch duckte und er schien ein wenig betroffen. „Ein stolzer Junge, den Sie da haben, gnädige Frau, läßt sich nur von Ihnen anrühren!“ Dieses Wort „anrühren“ ist mir im Sinn geblieben, es hat mich zu meinem Haß gegen ihn bestimmt, einem Haß, wie ich ihn noch nie gekannt hatte. Er tat mir nichts, aber er schmeichelte mir und suchte mich zu gewinnen. Er tat das von nun an mit erfinderischer Zähigkeit, er dachte sich Geschenke aus, mit denen er mich zu überrumpeln suchte, und wie hätte er annehmen sollen, daß der Wille eines noch nicht elfjährigen Kindes dem seinen nicht nur ebenbürtig war, sondern stärker.

母は彼に私のことを話していた！彼は、私たちが一緒に読んだものについては何でも知っていた。彼は私を褒めた。母は私を決して褒めなかった。私は彼の鬚に不信の念を抱き、彼を避けた。私が恐れたのは、彼が鬚でひとたび私に触れると、私が即座に奴隷に変身し、何でも彼に運んで行かねばならないような事態だった。彼の声色は少し鼻音がかかっていて、肝油から出てくるようだった。彼は私の頭に手を置こうとした

が、ひよっとするとそれで私を褒めるつもりだったのかもしれない。しかし私は素早く身を屈めながらその手を避けたので、彼は少し当惑したようだった。「あなたがお持ちのお子さんは誇り高い少年ですね、奥様、あなたにしか触れさせませんね！」この「触れる」という言葉は私の感覚に刻み込まれ、彼に対する私の憎悪を決定的にした。私がまだ一度として知らなかったような憎悪である。彼は私に何もしなかったが、私にお世辞を言い、私の心を勝ち取ろうと試みた。そのため今や彼は、想像力豊かな粘り強さを発揮しはじめた。彼は贈り物を考え出し、それによって私の不意を襲うことを試みた。だが、まだ11歳にもならぬ子供の意志が彼の意志に匹敵するばかりでなく、もっと強いものだというのを、彼はどうして想定できただろう。

Denn er bemühte sich sehr um meine Mutter, sie hatte eine tiefe Neigung in ihm geweckt, wie er ihr sagte - aber das erfuhr ich erst später -, die tiefste seines Lebens. Er wollte sich um ihretwillen von seiner Frau scheiden lassen. Er werde sich der drei Kinder annehmen und ihr bei ihrer Erziehung helfen. Alle drei könnten an der Wiener Universität studieren, der älteste solle aber auf alle Fälle Mediziner werden, und wenn er Lust habe, könne er auch später sein Sanatorium übernehmen. Die Mutter war nicht mehr offen zu mir, sie hütete sich, mir das alles zu sagen, sie wußte, daß es mich vernichtet hätte. Ich hatte das Gefühl, daß sie zu lange im Sanatorium blieb, er wollte sie nicht weglassen. „Du bist doch schon ganz gesund“, sagte ich ihr bei jedem Besuch. „Komm nach Haus und ich werde dich pflegen.“ Sie lächelte, ich sprach, als wäre ich erwachsen, ein Mann und gar ein Arzt dazu, der alles wisse, was zu tun sei. Am liebsten hätte ich sie aus dem Sanatorium getragen, auf meinen eigenen Armen. „Eines Nachts komm ich dich rauben“, sagte ich. „Es ist aber zugesperrt unten, du kommst nicht herein. Du mußt schon warten, bis der Arzt mir erlaubt, nach Hause zu gehen. Jetzt dauert es nicht mehr lange.“

というのも、彼は母の心を得ようと努力していた。彼が彼女に述べたように、母は彼の心に深い愛着心を呼び覚ました……しかしそのことを私はようやく後になって知った……彼の人生のもっとも深い愛着心を。彼は母のために妻と離婚したいと思っていた。彼は3人の子供を引き取り、その教育でも母を手助けしたいと述べた。3人ともすべてヴィーン大学で学ぶことが

できるが、長男はいかなる場合にも医学者になるべきだ。そしてもし長男にその気があるなら、後に彼のサナトリウムを引き継ぐことも可能だと。母はもはや私に対して率直ではなかった。彼女は私に何もかも洗いざらい述べないよう用心していた。そうすれば私を破滅させることがわかっていた。私は、彼女がサナトリウムに長く逗留しすぎているという感情を抱いた。彼は彼女を放免しようとしなかった。「あなたはもうすっかり健康じゃありませんか」と、私は訪問のたびに彼女に言った。「家に帰ってらっしゃい、そうすれば私があるあなたの面倒を見ます。」彼女は微笑した。私はまるで成長した一人前の男、その上ちゃんとした医者であるかのように話した。何をすべきか、すべてわかっている医者のように。できることなら彼女をサナトリウムから私自身の両手で運び出したかった。「夜中あなたを略奪しに来るでしょう」と私は言った。「しかし下は鍵がかかっているわ、おまへは中へ入れない。医者が帰宅を許可するまで、やはりおまへは待たなければならない。今からもう長くはかからないわ。」

Als sie nach Hause zurückkam, wurde vieles anders. Der Herr Dozent verschwand nicht aus unserem Leben, er kam sie besuchen, er kam zum Tee. Er brachte mir jedesmal ein Geschenk, das ich dann gleich, kaum war er aus der Wohnung, wegwarf. Kein einziges Geschenk von ihm habe ich länger als für die Dauer seines Besuchs behalten, und es gab Bücher darunter, die ich für mein Leben gern gelesen hätte, und wunderbare Kristalle, die in meiner Sammlung fehlten. Er wußte schon, was er mir schenke, denn kaum hatte ich begonnen, von einem Buch zu sprechen, das mich lockte, so war es auch schon da, aus seinen Händen legte es sich auf den Tisch in unserem Kinderzimmer, und es war, als sei ein Mehltau auf das Buch gefallen - nicht nur warf ich es dann fort und mußte, was gar nicht so leicht war, die richtigen Orte dafür finden -, ich habe auch später das Buch mit diesem Titel nie gelesen.

母がうちへ帰ってきたとき、多くのことが変化した。講師先生が私たちの生活から消えることはなく、母を訪ねてきた。お茶にやってきた。彼はいつも私にプレゼントを持参した。彼が住まいから姿を消すや、私はすぐにそのプレゼントを投げ捨てた。私は彼のプレゼントのひとつとして、彼の訪問時間より長くは手元にとどめなかった。プレゼントには私が生涯読み続けたような書物があったし、私の収集物に欠けている見

事な水晶があった。彼には何を私にプレゼントするかがすでにわかっていた。それというのも、私を魅惑した本について話しかけたことがあると、もうその本は目の前にあった。彼の両手から、私たちの子供部屋のテーブルの上に置かれた。まるでうどん粉病がその本に降りかかったみたいだった……そんなとき、私はただ単に本を遠くへ投げ捨てたばかりではない。実際容易ではなかったが、本に相応しい場所を見つけねばならなかった……私は後になっても、この表題の本を決して読むことはなかった。

Die Mutter war noch erholungsbedürftig, und unsere Lesabende waren seltener geworden. Sie spielte mir nie mehr etwas vor und ließ nur mich laut lesen. Ich gab mir Mühe, Fragen zu finden, die ihr Interesse wecken könnten. Wenn sie eine längere Antwort gab, wenn sie wirklich wie früher etwas erklärte, schöpfte ich Hoffnung und war wieder glücklich. Aber oft war sie nachdenklich und verstummte manchmal, als wäre ich gar nicht da. „Du hörst mir nicht zu“, sagte ich dann, sie zuckte zusammen und fühlte sich ertappt. Ich wußte, daß sie an andere Lektüre dachte, über die sie nicht zu mir sprach.

母はまだ保養が必要だった。そこで私たちの読書の夕べはいっそう稀になっていた。彼女はもはや私の前で何か演じることはなく、ただ私に大きな声で読ませるだけだった。私は彼女の興味を呼び覚ます質問を見つけようと努力した。彼女が比較的長い返答をし、彼女が実際以前のように何かの説明をすると、私は希望がもてて再び幸せだった。しかし彼女はしばしば思いに沈み、時には沈黙した。まるで私とその場にはいないかのように。そんなとき、「あなたは私の話を聞いていない」と私は言った。彼女はびっくりと痙攣し、自分が現場を取り押さえられたように感じた。彼女が読んだ別の本、私に話していない本のことを考えているのが私にはわかっていた。

Sie las Bücher, die der Herr Dozent ihr schenkte, und schärfte mir streng ein, daß sie nichts für mich seien. Den Schlüssel zum Bücherkasten im Speisezimmer, der früher immer stak, so daß ich nach Herzenslust darin rumoren konnte, zog sie jetzt ab. Ein Geschenk von ihm, das sie besonders beschäftigte, waren Baudelaires >Les Fleurs du Mal<. Zum erstenmal, seit ich sie kannte, las sie Gedichte. Das wäre ihr früher nicht eingefallen, sie verachtete Ge-

dichte. Dramen waren immer ihre Leidenschaft gewesen und damit hatte sie mich angesteckt. Jetzt nahm sie >Don Carlos< oder >Wallenstein< nicht mehr zur Hand und verzog das Gesicht, wenn ich sie erwähnte. Shakespeare zählte noch, er zählte sogar sehr, aber statt darin zu lesen, suchte sie nur nach bestimmten Stellen, schüttelte unmutig den Kopf, wenn sie sie nicht gleich fand, oder lachte übers ganze Gesicht, wobei erst ihre Nasenflügel bebten, und sagte mir nicht, worüber sie lachte. Romane hatten sie früher schon interessiert, aber sie wandte sich welchen zu, die ich bisher nie bemerkt hatte. Ich sah Bände von Schnitzler, und als sie mir unvorsichtig sagte, nicht nur, daß er in Wien lebe und eigentlich Arzt sei, sondern sogar, daß der Herr Dozent ihn kenne und daß seine Frau eine Spaniolin sei wie wir, war meine Verzweiflung vollkommen.

彼女は講師先生にプレゼントされた書物を読んでいました。そして私に、それは私が読む本ではないと厳命した。食堂の本棚の鍵は、以前は差し込まれたままだったので、私は存分に中をかき回せたが、彼女は今やその鍵を引き抜いていた。特別彼女の心を奪った彼からの贈り物は、ボードレールの「悪の華」だった。私が彼女を知るようになってこのかた、初めて彼女は詩を読んでいた。以前なら彼女の思いつかないことだったろう。彼女は詩を軽蔑していた。ドラマがいつも彼女の情熱だったし、その情熱は彼女によって私に伝染した。今や彼女は「ドン・カルロス」または「ヴァレンシュタイン」をもう手に取らなかつたし、私がそれらに言及すると顔をしかめた。シェークスピアはまだ重きをなしていた。しかも大いに重きをなしていたが、それを読む代わりに、彼女はただ決まった箇所を探すばかりで、もしすぐに見つからないと不機嫌そうに頭を振った。あるいは満面に笑みを浮かべたが、その際ようやく彼女の小鼻が震えた。だが何を笑っているのか、私に言うことはなかつた。小説は以前からすでに彼女の興味を引いていた。しかし私がこれまで決して気づかなかつた小説に向かっていた。私はシュニツラーの数巻の本を目にした。そして彼女が不用意にも私に、彼はヴィーンで生活し本来医者であるだけでなく、例の講師先生が彼を知っており、彼の妻は私たちと同じスバニオールでさえあると言ったとき、私の絶望は完璧だった。

„Was möchtest du, daß ich werde?“ fragte ich einmal, in

großer Angst, als wüßte ich, was für eine schreckliche Antwort kommen würde. „Am besten ist Dichter und Arzt zusammen“, sagte sie. „Das sagst du bloß wegen Schnitzler!“ „Ein Arzt tut Gutes, ein Arzt hilft Menschen wirklich.“ [----] „Ein guter Arzt versteht etwas von Menschen. Da kann er auch ein Dichter sein und schreibt kein dummes Zeug.“ „Wie der Herr Dozent?“ fragte ich und wußte, wie gefährlich die Sache nun werde. Er war kein Dichter, und diesen Schlag wollte ich ihm versetzen. „Er muß nicht wie der Herr Dozent sein“, sagte sie, „aber wie Schnitzler.“ „Warum darf ich ihn dann nicht lesen?“ Darauf antwortete sie nicht, aber sie sagte etwas, das mich in noch größere Aufregung versetzte. „Dein Vater hätte gern gehabt, daß du ein Arzt wirst.“ „Hat er dir das gesagt? Hat er dir das gesagt?“ „Ja, oft. Er hat mir's oft gesagt. Das hätte ihm die größte Freude gemacht.“ Sie hatte es nie erwähnt, kein einziges Mal seit seinem Tode hatte sie es erwähnt. Ich wußte wohl, was er mir bei jenem Spaziergang am Ufer der Mersey gesagt hatte: „Du wirst werden, was du gern willst. Du brauchst nicht ein Kaufmann zu werden wie ich. Du wirst studieren und was dir am besten gefällt, wirst du werden.“ Aber das hatte ich für mich behalten und keinem Menschen, nicht einmal ihr je gesagt. Daß sie jetzt zum erstenmal davon sprach, bloß weil ihr Schnitzler gefiel und der Herr Dozent sich bei ihr einschmeichelte, versetzte mich in Zorn. Ich sprang von meinem Sessel auf, stellte mich böse vor sie hin und schrie: „Ich will kein Arzt sein! Ich will kein Dichter sein! Ich werde Naturforscher! Ich fahre weit weg, wo mich niemand findet!“ „Livingstone war auch ein Arzt“, sagte sie höhnisch, „und Stanley hat ihn gefunden!“ „Aber du wirst mich nicht finden! Du wirst mich nicht finden.“ Es war Krieg zwischen uns und es wurde von Woche zu Woche schlimmer. (Krankheit der Mutter. Der Herr Dozent)

「あなたは、私が何になるのを望んでいるんですか？」と、私は一度大いに不安を抱きながら尋ねた。どんな恐ろしい返答が帰ってくるか、まるで私にはわかっているかのように。「一番いいのは、詩人と医者が一緒であることだわ」と彼女は言った。「あなたは単にシュニツラーのせいだそう言っている！」「医者は良いことをしています。医者は実際に人々を助けています。」…… (中略) ……「良い医者は人間について何かを理解しています。だから詩人でもあり得るし、つまらないものを書くことはありません。」「講師

先生のように？」と私は尋ねた。問題が今やいかに危険なものになったかが、私にはわかった。彼は詩人ではなかった。それで私は彼に一撃を加えたかった。「良い医者は講師先生みたいではないにちがいません」と彼女は言った。「しかしシュニツラーのようではなければ。」「それなら何故、私は彼を読んではいけないのですか？」それには彼女は答えなかった。しかし彼女は、私を更にいっそう興奮させることを言った。「父は、おまえが医者になることを喜んだでしょう」「彼はあなたにそのことを言いましたか？彼はあなたにそのことを言いましたか？」「ええ、何度も。彼は何度も私にそれを言いました。それは彼にとって大いなる喜びだったでしょう。」彼女はそのことを決して述べたことはなかった。彼の死以来、一度として述べたことはなかった。あのマージ河畔の散歩で、彼が私に言ったことが私にはちゃんとわかっていた。「おまえは自分になりたいものになったらいい。おまえは私のように商人になる必要はない。大学で学び、おまえが一番気に入ったものになったらいい。」しかし私はそのことを自分の胸にしまっていた。そして誰にも、彼女にさえ、かつて一度として言ったことはなかった。ただ単にシュニツラーが彼女のお気に召したから、また講師先生が彼女に媚びていたが故に、今初めてそのことを話題にしたことが、私を怒らせた。私は椅子から飛び上がり、腹を立てながら彼女の前に立ち、叫んだ。「医者にはならない！詩人にはならない！私は自然研究者になる！私は誰にも見つけられぬずっと遠いところへ行く！」「リビングストーンも医者だった」と、彼女は皮肉っぽく言った。「そしてスタンレイが彼を見いだしたのよ！」「しかしあなたは私を見つけることはできないでしょう！あなたは私を見つけることはできない。」それは私たちの間の戦争だった。そして週毎に事態は悪化していった。

Der Balkon, der früher tagsüber der Ort aller ernststen Gespräche gewesen war, hatte einen vollkommen veränderten Charakter: Ich mochte ihn nicht mehr. Seit der Haß auf den teetrinkenden Herrn Dozenten an diese Lokalität gebunden war, erwartete ich, daß er einstürzen würde. Ich schlich mich, wenn niemand mich sehen konnte, auf ihn hinaus und prüfte die Festigkeit des Steins, allerdings nur auf der Seite, wo er zu sitzen pflegte. Ich hoffte auf Brüchigkeit und war bitter enttäuscht, daß nichts sich regte. Alles schien so fest, wie es immer gewesen war, und auf

meine Sprünge antwortete keine Erschütterung, nicht die leiseste.

以前、昼間のあらゆる真面目な会話の場所だったバルコニーは、完全に変わり果てた性格を持つことになった。私はもはやバルコニーが好きでなかった。お茶を飲む講師先生への憎しみが、この場所に結びついて以来、私はバルコニーが倒壊することを待ち望んだ。私は誰にも見られていないとき、バルコニーへこっそり出てゆき、石の堅固さを調べた。勿論たいてい彼が座っていた側だけを。私は壊れやすくなっていることを願ったが、何一つびくともせず、ひどく失望した。すべてが、いつもどおりしっかりしているように見えた。私が飛び跳ねてみても、ほんのわずかでも振動することはなかった。

Die Abwesenheit der Brüder stärkte meine Position. Es war undenkbar, daß wir immer von ihnen getrennt bleiben würden, und eine Übersiedlung in die Schweiz wurde nun häufig erwogen. Ich tat alles, um eine Beschleunigung dieser Reise zu bewirken, und machte der Mutter das Leben in Wien so schwer wie möglich. Die Entschlossenheit und Grausamkeit des Kampfes, den ich führte, bereitet mir noch in der Erinnerung Qualen. Ich war gar nicht sicher, daß ich gewinnen würde. Der Einbruch der fremden Bücher in das Leben der Mutter machte mir viel mehr Angst als der Herr Dozent persönlich. Hinter ihm, den ich verachtete, weil ich ihn kannte und vor seiner glatten, schmeichlerischen Sprache Ekel empfand, stand die Figur eines Dichters, von dem ich keine Zeile lesen durfte, den ich gar nicht kannte, und niemals habe ich einen Dichter so sehr gefürchtet wie damals Schnitzler.

弟たちの不在は私の立場を強くした。私たちがいつも弟たちと離れたままの状態は考えにくかった。そこで今やスイスへの移住がたびたび考慮された。私はこの旅立ちを促す働きかけなら何でもした。そのため母のヴィーンでの生活を可能な限り辛いものにしてしまった。私がおこなったその戦いの断固たる残酷さは、まだ記憶に留まっていて、私を苦しめる。私が勝つなどとは、全然確信がなかった。母の生活への見知らぬ書物の侵入は、講師先生個人よりはるかに大きな不安を私に抱かせた。私は講師先生を知っていたし、彼の要領いいお追従の言葉に吐き気を感じた。それ故、軽蔑した彼の背後に、ある詩人の姿が立っていた。私はその詩人の一行たりとも読むことを許されなかった。

私はその詩人を全然知らなかった。だから当時のシュニツラーほど、私が恐れた詩人は決してなかった。

Die Bewilligung zu einer Ausreise aus Österreich war zu jener Zeit keine leichte Sache. Vielleicht hatte die Mutter von den Schwierigkeiten, die dabei zu überwinden waren, eine übertriebene Vorstellung. Sie war noch immer nicht gesund und sollte eine Nachkur machen. Reichenhall, wo sie sich vor vier Jahren rasch erholt hatte, hatte sie in guter Erinnerung. So erwog sie, von Wien nach Reichenhall zu fahren und dort einige Wochen mit mir zu verbringen. Von München aus meinte sie leichter ein Ausreisevisum in die Schweiz zu erlangen. Der Herr Dozent machte sich erbötig, nach München zu kommen, um ihr bei den Formalitäten behilflich zu sein. Seine akademischen Verbindungen und sein Bart würden ihren Eindruck auf die Behörden nicht verfehlen. Ich war Feuer und Flamme für diesen Plan, sobald ich seinen Ernst erfaßte, und stützte nun plötzlich die Mutter auf jede Weise. Nach der unversöhnlichen Feindschaft, die sie von mir erfahren hatte und die sie auf Schritt und Tritt lähmte, fühlte sie große Erleichterung darüber. Wir machten Pläne für die Wochen, die wir allein in Reichenhall verbringen würden. Heimlich hoffte ich darauf, daß wir zu unseren Dramen wiederfinden würden. Diese Abende waren immer seltener geworden und schließlich an ihrer Zerstretheit und auch an ihrer Schwäche eingegangen. Von Coriolan, wenn es mir nur gelang, ihn wieder zu erwecken, erwartete ich Wunder. Aber ich war zu stolz, ihr zu sagen, wieviel ich auf die Wiederkehr unserer Abende setzte. Jedenfalls würden wir von Reichenhall aus zusammen Ausflüge machen und viel spazieren gehen.

オーストリアからの出国許可は、あの時代容易なことではなかった。ひょっとすると母は、その際に克服すべき幾つかの困難について、大げさな観念を抱いたのかもしれない。彼女は相変わらず健康でなかったし、後治療が必要だったろう。4年前急速に健康を回復したライヘンハルは、彼女にいい記憶を残していた。そんなわけで彼女はヴィーンからライヘンハルへ行き、そこで私と数週間過ごすことを考慮した。ミュンヘンからスイスへの出国ヴィザを手に入れる方が容易だと、彼女は考えた。講師先生は、彼女の二つの手続きを援助するために、ミュンヘンへ来ることをみずから申し出た。彼の大学との結びつきや彼の髭は、お役

所への印象という点でゆるがせにできないものだろう。彼が本気だとわかるや、私はこの計画に火と炎となって熱中した。そして今や突如として、私はあらゆる方法で母を支援した。彼女が私から被っていた敵対、絶えず彼女を萎えさせた和解しがたい敵対の後、彼女はこの支援に大きな安堵を感じた。私たちは、ライヘンハルで私たちだけで過ごすことになる数週間の計画を練った。密かに私は、私たちがドラマへ到る道を再発見することを望んだ。これらの夕べはいっそう稀になっていたし、結局彼女の注意散漫と衰弱で中断してもいた。もし私がコロオランを再び呼び覚ますことだけでも成功すれば、私は彼から奇跡を期待できた。しかし私は自尊心が強すぎて、私たちの夕べの再現をどれほど重要視しているか彼女に言えなかった。いずれにしろ私たちは、ライヘンハルから一緒にハイキングしたり、あちこち散歩することになるだろう。

An die letzten Tage in Wien kann ich mich nicht erinnern. Ich weiß nicht mehr, wie wir die vertraute Wohnung und den fatalen Balkon verließen. Ich habe auch keine Erinnerung an die Reise. Ich sehe uns erst in Reichenhall wieder. Ein kleiner täglicher Sopaziergang führte uns nach Nonn. Da war ein winziger Kirchhof, sehr still, der es ihr schon damals, vor vier Jahren, angetan hatte. Wir gingen zwischen den Grabsteinen umher, lasen die Namen der Toten, die wir bald kannten, und lasen sie trotzdem immer wieder. Da möchte sie begraben sein, sagte sie. Sie war 31, aber ich wunderte mich nicht über ihre Grabgelüste. Wenn wir nur allein waren, ging alles, was sie dachte, sagte oder tat, wie die natürlichste Sache in mich ein. Aus den Sätzen, die sie mir zu solchen Zeiten sagte, bin ich entstanden.

私はヴィーンの最後の日を思い出すことができない。どんな風にして、私たちが慣れ親しんだ住居とあの運命的なバルコニーを去ったのか、私にはもはやわからない。旅行についても私の記憶にない。私はライヘンハルで初めて自分たちの姿に再会する。毎日のちょっとした散歩が私たちをノンへと導いた。そこにはちっぽけな墓地があった。非常に静かで、すでに4年前当時、その墓地は彼女を夢中にさせた。私たちは墓石の間をあちこち歩き回り、程なくして知った死者たちの名前を読んだ。そしてそれでも繰り返し名前を読んだ。そこに葬られたいと彼女は言った。彼女は31歳だったが、私は彼女の甲いへの強い欲求を訝しくは思わなかった。私たちだけだったときには、彼女が考えたり、

述べたりまたは行動したすべてが、もっとも自然なことのように私の胸に収まった。そのようなとき彼女が私に述べた文章から、私は成り立っている。

Doch als München sich näherte, meldete sich die Sorge. Ich fragte aber nicht, wie lange wir da bleiben würden. Um mir die Angst davor zu nehmen, sagte sie von selber, daß es gar nicht so lange dauern würde. Dazu käme ja Herr Dozent. Mit seiner Hilfe würden wir vielleicht schon in einer Woche mit allem fertig. Ohne ihn sei es gar nicht sicher, daß uns die Ausreise bewilligt würde. Ich glaubte ihr, denn noch waren wir allein.

だがミュンヘンが近づくにつれ、気がかりな点が頭を擡げた。しかし私は、私たちがどれ位そこに滞在するのか尋ねなかった。私の不安を取り除くため、彼女みずから大して長くならないだろうと述べた。それに間違いなく講師先生がやってくる。彼の援助で、ひよっとすると一週間以内ですべてが済むだろう。彼がいなければ、私たちの出国許可は全然確実でないだろうと。私は彼女の言うことを信じた。というのもまだ私たちだけだったからである。

Schon bei der Ankunft in München brach das Unglück wieder über mich herein. Er war vor uns angekommen und erwartete uns am Bahnhof. Wir sahen beide zum Coupéfenster hinaus, mit demselben Gedanken, aber ich war es, der den schwarzen Bart auf dem Perron zuerst entdeckte. Er begrüßte uns mit einiger Feierlichkeit und erklärte, er bringe uns gleich ins Hotel >Deutscher Kaiser<, wo für die Mutter und mich zusammen, wie sie es gewünscht hätte, ein Zimmer aufgenommen sei. Er habe schon einige gute Freunde verständigt, die sich eine Ehre daraus machen würden, uns Empfehlungen zu geben und auch sonst auf jede Weise behilflich zu sein. Im Hotel stellte es sich heraus, daß auch er da wohnte. Das sei einfacher, damit keine Zeit verlorenginge, bei den vielen gemeinsamen Laufereien, die uns bevorstünden, sei das wichtig. Leider müsse er schon in sechs Tagen nach Wien zurück, das Sanatorium erlaube ihm keine längere Abwesenheit. Ich durchschaute ihn gleich; mit den sechs Tagen wollte er die Wirkung des gleichen Hotels abschwächen, eine Nachricht, die mich zwar wie ein Keulenschlag traf, aber keineswegs lähmte.

すでにミュンヘン到着の際、不運が再び私の身に降りかかった。彼は私たちより前に着き、駅で私たち

を待ち受けていた。私たち二人は同じことを考えながら、車室の窓から外を眺めた。しかしプラットフォームで黒い髭をまず最初に見つけたのは私だった。彼は私たちにいくらか儀式張った挨拶をすると、こう説明した。すぐに私たちを「ドイツ皇帝」ホテルへ連れていく。そこに、彼女が望んでいたように、母と私の一緒の部屋を取っている。彼はすでに信頼できる友人何名かに了解を取り付けた。彼らは私たちの身元を保証し、ほかの点でも、あらゆる方法で助力することを誇りに思うであろうと。ホテルでは、彼もそこに宿を取っていることが判明した。これは時間を無駄にしないきわめて単純なことで、目前に差し迫っているいろんなことに対して、一緒に奔走するとき重要なことだと。残念だが、彼はすでに6日以内にヴィーンへ帰らねばならない。サナトリウムがそれ以上の不在を許してくれないと。私はすぐに彼の考えを見抜いた。6日でもって、彼は同じホテルの影響を弱めようとした。その情報はなるほど棍棒の一撃のようなものだったが、しかし決して私を萎れさせはしなかった。

Aber ich irrte mich, die sechs Tage gingen vorüber und alles war zur Reise fertig. Er begleitete uns bis nach Lindau - zum Schiff. Ich spürte die Feierlichkeit der Trennung. Am Kai küßte er der Mutter die Hand, es dauerte etwas länger als sonst, aber niemand weinte. Dann gingen wir aufs Schiff und blieben an der Reling stehen, die Tauen wurden gelöst, der Herr Dozent stand da, den Hut in der Hand und bewegte die Lippen. Langsam entfernte sich das Schiff, aber ich sah noch immer, wie sein Lippen sich bewegten. Mein Haß glaubte noch die Worte zu erkennen, die er sagte: „Küß die Hand, Gnädigste.“ Dann wurde der Herr Dozent kleiner, der Hut ging in einer eleganten Kurve auf und ab, der Bart blieb pechschwarz, der Bart schrumpfte nicht, jetzt blieb der Hut feierlich in der Höhe des Kopfes, aber in einiger Entfernung von ihm, in der Luft schweben. Ich sah nicht um mich, ich sah nur den Hut, und ich sah den Bart, und mehr und mehr Wasser, das uns davon trennte. Ich startete noch unbeweglich hin, als der Bart so klein geworden war, daß nur ich ihn erkannt hätte. Dann plötzlich war er verschwunden, der Herr Dozent, der Hut und der Bart und ich sah die Türme von Lindau, die ich vorher nicht bemerkt hatte. (Der Bart im Bodensee)

しかし私は思い違いをした。6日間が過ぎ去り、旅立ちの準備はすべて終わった。彼はリンダウまで私た

ちに同伴した……船まで。私は別れの厳肅さを感じた。棧橋で彼は母の手にキスをした。いつもより少々長かったが、誰も泣かなかった。それから私たちは乗船し、手すりの側に立ち止まった。とも綱がとかれた。講師先生は、手に帽子を持ちあちらに立っていた。そして唇を動かした。ゆっくりと船は離れた。しかし私は相変わらず、彼の唇が動く様子を見ていた。私の憎しみの気持ちだが、「手にキスを、奥様」と言った彼の言葉をまだ認めたと考えた。それから講師先生は小さくなった。帽子は上品な曲線を描きながら、上がった沈んだりした。髭は真っ黒なままだった。髭が縮むことはなかった。今や帽子は頭の高さに厳かに、しかし頭からかなり離れて、空中を漂い続けた。私は周囲を見ることはなく、ただ帽子だけを見ていた。それから髭を、またいっそう私たちを引き離す水面を。髭が小さく小さくなって、ただ私にだけ見分けられるほどになったとき、私はまだ身動きもせずじっと彼方を見つめていた。それから突然、彼がかき消えた。講師先生が、帽子と髭が。そして私は、前には気づかなかったリンドウのいくつもの塔を目にした。

こうしてわれわれは、第3部のヴィーン時代を語り手とともに辿ってきた。11歳にもならぬカネッティの母との関係は、父親不在の中で、まさしく父の代理を務める背伸びした努力以外の何ものでもなからう。しかもここに描写された現実、精神的な中味と内実の点で、驚嘆の一語に要約できる。これほどまでに強い絆、これほどの母子の対等な関係をどうして想像することができようか。単なる年齢の違い、性別の違いを越える仮の想像上の対等な関係にすぎないにしても、劇的な対話の場面はまさにレーゼドラマそのままの趣を示している。読者として第3者が入り込む余地はない。カネッティのすさまじい嫉妬心を別にしても、書物による母親の新たな読書による出会いのほかには、何者も割り込める場所はない。この強靱で弓の張りつめたような母と子の関係は、純粹培養された孤独な関係、父と子と母の三位一体の関係から、父に成り代わる息子による父の追放といった概念的抽象図式による理解、実体なき否定的解釈によっては捉えきれないものを隠している。父親はすでにこの世になく、登場する機会が彼らの記憶という過去の非現実的虚構の舞台にしかない。むしろこの不思議なほどの強い絆で結ばれた母子関係は、父親の不在によって支えられ、その空白を意識する母と子にとっては、父は甘味なものを

もたらず回想の人物像として定着している。この空白感を書く力へと転嫁させる所にこそ、将来の作家、詩人カネッティを産み出す肥沃な土壌が広がっていると考えるべきではないだろうか。

第3部は、父親の言葉を巡る二人の理解の相違、あるいは虚実ない交ぜになった言説の解釈の違いを明らかにしながら、所々に不和を暗示する文章を挟み、緊密な二人の愛憎関係が長いページに渡って描き出される。母と子の愛と憎しみは、基本的に同じ深い根から発せられる感情であろう。その対極に位置するものとしては当然、無関心という言葉が想像できる。カネッティのあらゆる問いに対して、文学的解釈であれ、また年長者としての助言的解説であれ、これほどまでにお互いに対する理解と関心への激情は、厳しい言葉による表現の相違だけでなく、漸次、個々の人間の違いをもえぐり出すことになるであろう。もちろん著者として自伝を書き進める現在のカネッティが、所々に顔を出しているからこそ、二人の対等な敵対的關係も折々かなりの頻度で提出される。自伝の流れを辿る読者にとっては、奇異な感じを伴うことは避けられないが、しかしだからこそ、将来の母と子の関係がひとりの人間対人間の関係としていかなる経路を辿るかが予め暗示されているとも言える。

更に次の後半部第4、5部において、世界と人間を見つめる眼差しでいよいよ力を付けたカネッティが母と真つ向から向き合い、様々な知恵と自分の舌を獲得するためにいっそう激越な愛憎関係を作り上げていくのは間違いなからう。あるいはこの絶対的な二人の関係とは別の、第3の人物を伴う新たな複雑な関係が姿を見せることになるのだろうか。

カネッティの端正なドイツ語が目指すものは、ユセフ・イシャグプールが書いているように、一方で一貫した事柄の意味を求めながら、他方でどう動いてゆくかわからぬ些末事とその可能性が含みうる豊かさ、多様さ、不思議さとの矛盾撞着をそのままに描き出すことである。基本的には、ここでは風景画も地形図も関係なく、人間と人間との関係から創出される空間が問題であり、焦点は常にそこからずれることはない。この濃密な人間関係に限定された空間は、決して狭隘な心理劇に留まるものではない。なぜならカネッティの激しい情熱、生来の激情によって、倦むことなく突き

詰めた関係の姿を浮かび上がらせるからである。ここには当然ながらカネッティが生涯関心を持ち続けた「権力」の問題が顔を覗かせているが、われわれは意図的にこの主題を先送りして、当面の叙述に従い、物語としての場면을辿ることにしたい。

われわれは第4部チューリッヒ(シヨイヒツァー通り)(1916-1919)を、母に再婚を勧める祖母のアルディッチとその娘エルネスチーネに対して、カネッティがいかなる応接をするかの場面からはじめよう。

Jeden Abend, wenn wir Kinder zu Bett gegangen waren, kamen sie zu Besuch. Eines Nachts, ich sah von meinem Bett den Lichtschimmer vom Wohnzimmer, hörte ich ein Gespräch auf spanisch zwischen den Dreien, das ziemlich heftig war, die Stimme der Mutter klang erregt. Ich stand auf, schlich mich an die Tür und sah durchs Schlüsselloch richtig, da saßen noch die Großmutter und die Tante Ernestine und sprachen, besonders die Tante, rasch auf die Mutter ein. — Als die Mutter sehr heftig ausrief: „Aber ich will ihn nicht heiraten!“ wußte ich, daß meine Angst mich nicht getrogen hatte. Ich riß die Tür auf und stand plötzlich im Nachthemd unter den Frauen. „Ich will nicht!“ schrie ich zornig zur Großmutter gewandt, „ich will nicht!“ Ich stürzte auf die Mutter zu und packte sie so heftig, daß sie ganz leise - sagte: „Du tust mir weh.“ Aber ich ließ sie nicht los. Die Großmutter, die ich nur mild und schwächlich kannte, ich hatte nie ein Wort von ihr gehört, das mir Eindruck gemacht hätte, sagte böse: „Warum schläfst du nicht? Schämst du dich nicht, an der Tür zu horchen?“ „Nein, ich schäme mich nicht! Ihr wollt die Mutter beschwatzen! Ich schlaf nicht! Ich weiß schon, was ihr wollt. Ich werde nie schlafen!“ Die Tante, die Hauptschuldige, die so hartnäckig auf die Mutter eingespochen hatte, schwieg und funkelte mich an. Die Mutter sagte zärtlich: „Du kommst mich beschützen. Du bist mein Ritter. Jetzt wißt ihr’s hoffentlich“, wandte sie sich an die beiden: „Er will nicht. Ich will’s auch nicht!“ Ich rührte mich nicht von der Stelle, bis die beiden Feinde aufstanden und gingen. Ich war noch immer nicht besänftigt, denn ich drohte: „Wenn die wiederkommen, gehe ich nie mehr schlafen. Ich bleibe die ganze Nacht wach, damit du sie nicht einläßt. Wenn du heiratest, stürze ich mich vom Balkon herunter!“ Es war eine

furchtbare Drohung, sie war ernst gemeint, ich weiß mit absoluter Sicherheit, daß ich es getan hätte. (Der Schwur)

毎晩、私たち子供がベッドにはいると、彼女たちは訪ねてきた。ある晩、私は居間から微かな光が漏れているのをベッドで認め、三人がスペイン語でかなり激しく話し合うのを聞いた。母の声は興奮しているようだった。私は立ち上がり、ドアまで忍び足で近づき、鍵穴から覗きこんだ。まさしくそこには、まだ祖母と伯母のエルネスチーネが座っていた。そして特に伯母が、母に性急に食ってかかっていた。……(中略)……「だけど私は彼と結婚する気はありません!」と、母が激越な調子で叫んだとき、私の不安が的はずれでなかったことがわかった。私はドアをさっと開けると、寝間着姿で突如女たちの中に立った。「私はいやだ!」と祖母に怒りを向けながら叫んだ。「私はいやだ!」私は母に駆け寄ると、激しく彼女を抱きしめた。彼女は……小聲で……「痛いわ」と言ったほどだった。しかし私は彼女を離さなかった。祖母の柔和で弱々しい面だけを知っていた私は、印象に残る言葉を彼女から聞いたことはなかったが、その祖母が意地悪くこう言った。「どうしておまえは寝ていないの? ドアで盗み聞きをするなんて恥ずかしくないの?」「ええ、恥ずかしことはない! あなたたちは母を言いくるめようとしている! 私は寝たりしない! 私にはあなたたちが何を望んでいるか、ちゃんとわかっている。私は決して寝たりしない!」頑ななほど、母に食ってかかっていた主犯の伯母は黙りこむと、私を怒りに燃える目で見つめた。母は優しくこう言った。「おまえは私を守るために来てくれた。おまえは私の騎士だわ。今となればあなたたちにもお分かりでしょう」と、母は二人に向きを変えた。「彼は望んでいない。私もそれを望んでいません!」私は二人の敵が立ち上がり、立ち去るまでその場を動かなかった。それでも私の気持ちはまだおさまらなかつた。というのも私はこう脅迫したのである。「もし彼女たちがまた来るなら、私はもう決して寝たりしない。あなたが彼女たちを中へ入れないように、一晩中起きている。もしあなたが結婚するなら、私はバルコニーから下へ飛び降りる!」それは恐ろしい脅迫だった。脅迫は本気だった。私には絶対確かなことだが、実際に飛び降りただろう。

スイスのチューリッヒでカネッティと母親を悩ませたのが、学校の問題だった。ヴィーンで小学校の4年生を終え、その後すぐリアルギウムナージウムに入学

し、1年間通っていたカネッティにとって、本来なら中学校 (die höhere Schule) 2年生編入が願いだっただが、年齢にこだわり、いかなる例外も認めない学校側と母との話し合いは決裂し、小学校 (Primarschule) 6年生への入学を余儀なくされた。しかも学年の始まりがヴィーンと違い、秋だった。そこで半年我慢すれば、Kantonsschule という Gymnasium への新たな道が開けるかもしれない。しかしヴィーンで2年先に進んでいたカネッティにとって、学ぶべきものは何もなく。ただチューリッヒで話される級友たちのドイツ語 (Zürichdeutsch) が興味を引いた。学校では標準的な文語的ドイツ語 (Schriftdeutsch) だったが、教師も時には方言 (Dialekt) をしゃべることがあった。

Die Mutter, die über die Reinheit unserer Sprache wachte und nur Sprachen mit Literaturen gelten ließ, war besorgt, daß ich mein >reines< Deutsch verderben könnte und als ich in meinem Eifer den Dialekt, der mir gefiel, zu verteidigen wagte, wurde sie böse und sagte: „Dazu habe ich dich nicht in die Schweiz gebracht, damit du verlernst, was ich dir über das Burgtheater gesagt habe!“ ----- Ich übte das Zürichdeutsch für mich allein, gegen den Willen der Mutter und verheimlichte vor ihr die Fortschritte, die ich darin machte. Es war, soweit es um Sprache ging, die erste Unabhängigkeit von ihr, die ich bewies, und während ich in allen Meinungen und Einflüssen ihr noch untertan war, begann ich mich in dieser einzigen Sache als >Mann< zu fühlen.

私たちの言葉の純正さを監視し、文学に関する言葉だけが正しい言葉だと認めていた母は、私の「純正な」ドイツ語が台無しになることを恐れていた。そこで私の気に入った方言を、私があえて熱烈に擁護したとき、彼女は腹を立ててこう言った。「私がブルク劇場について述べたこと、それを忘れるためにおまえをスイスに連れてきたわけではない。」…… (中略) ……私はチューリッヒドイツ語を、母の意志に反して自分ひとりのために練習した。そして練習の結果、上達しても母には秘密にした。それは、言葉に関する限りでの私を実証した母からの最初の独立だった。私はあらゆる意見や影響という点では、まだ母のしもべだったが、ただこのことでは自分を「一人前の男」と感じ始めた。

カネッティの親子4人家族の暮らしは、いかなる経済状態に基づいていたのだろうか？

Wir hatten indessen schon eine eigene Wohnung, und sie war wirklich bescheiden. Es war in dieser Züricher Zeit, daß mir die Mutter immer wieder einschärfte, wir mußten ganz einfach leben um durchzukommen. Vielleicht war es ein Erziehungsprinzip von ihr, denn sie war, wie ich jetzt weiß, bestimmt nicht arm. Im Gegenteil, ihr Geld war bei ihrem Bruder gut angelegt, sein Unternehmen in Manchester florierete nach wie vor, er wurde immer reicher. Er betrachtete sie als seinen Schützling, sie bewunderte ihn, und es wäre ihm nicht im Traum eingefallen, sie zu benachteiligen. Aber die Schwierigkeit der Wiener Kriegszeit, als eine direkte Verbindung mit England nicht möglich war, hatten Spuren in ihr hinterlassen. Sie wollte uns allen dreien eine gute Erziehung geben und zu dieser gehörte es, daß wir uns nicht an das Vorhandensein von Geld gewöhnten. Sie hielt uns sehr knapp, es wurde einfach gekocht. Mädchen hatte sie nach einer Erfahrung, die sie beunruhigte, keines. Sie besorgte selbst den Haushalt; bemerkte von Zeit zu Zeit, daß es ein Opfer sei, das sie für uns bringe, denn sie sei anders aufgewachsen; und wenn ich an das Leben dachte, wie wir es in Wien geführt hatten, erschien der Unterschied so groß, daß ich an die Notwendigkeit für solche Einschränkungen glauben mußte. (Ein Zimmer voll von Geschenken)

とかくする内に、私たちはすでに自分の住居を手に入れた。そして彼女は実に憤ましかった。私たちが急場をしのぐには質素な暮らしをしなければならぬと、母が再三再四私に教えこんだのは、ほかならぬこのチューリッヒ時代だった。ひょっとするとそれは、彼女の教育上の原則だったのかもしれない。というのは、今では私にわかっているように、彼女は確かに貧しくなかった。反対に彼女のお金は兄に投資され、よい結果を得ていた。マンチェスターの彼の事業は相変わらず繁盛していたし、彼はいっそう金持ちになっていた。彼は彼女を自分の被保護者と見なし、彼女は彼を賛美していた。彼女に損をさせることなど、彼は夢にも思いつかなかつたろう。しかし、イギリスとの直接的結びつきが不可能だったヴィーンの戦時中の困難さが、彼女の胸中に痕跡を残していた。彼女は私たち3人すべてがよい教育を受けることを願った。そのためには、お金があることに慣れないのが必要だった。彼女は私たちに余計な金は与えなかった。料理は質素だった。お手伝いの女の子は、不安にさせられた経験から雇わなかった。彼女はみずから家事を切り盛りした。そこ

で時折こう述べる事があった。彼女が私たちのために行っているのは犠牲的行為だ。それというのも、彼女は違った育ち方をしたのだからと。私たちがウィーンで暮らした生活ぶりを考えてみると、違いが余にも大きかったので、私はそういう切りつめた儉約生活の必要性を信じないわけにはいかなかった。

1917年の春からカネッティは Kantonsschule に通いはじめた。家から学校までは歩いて20分だった。その間、彼は長い物語を創作し自分一人で楽しんでいたが、弟たちにも話して聞かせることになった。

Diese Geschichten hingen alle mit dem Krieg zusammen, genauer: mit der Überwindung des Krieges. Die Länder, die Krieg wollten, mußten eines Besseren belehrt, nämlich so oft besiegt werden, bis sie's aufgaben. Von Friedenshelden aufgestachelt, taten sich die anderen, die guten Länder zusammen und sie waren soviel besser, daß sie schließlich siegten. Aber leicht war das nicht, es kam zu endlosen, zähen, bitteren Kämpfen, mit immer neuen Erfindungen, unerhörten Listen. Das Wichtigste an diesen Schlachten war, daß die Toten immer wieder zum Leben zurückkamen. Es gab besondere Zaubermittel, die dafür erfunden und eingesetzt wurden und es machte meinen Brüdern, die sechs und acht Jahre alt waren, keinen kleinen Eindruck, wenn plötzlich alle Toten, auch die der bösen Partei, die von Kriegen nicht ablassen wollte, sich vom Schlachtfeld erhoben und wieder am Leben waren. Um dieses Ende ging es in all den Geschichten, und was immer während der abenteuerlichen Wochen der Kämpfe geschah, der Triumph und die Glorie, die eigentliche Belohnung auch des Erzählers, war der Moment, in dem alle, ohne Ausnahme, wiederauferstanden und ihr Leben hatten.

これらの物語はすべて戦争と、より正確に言えば、戦争の克服と関係していた。戦争を願う国々は、迷いを覚まさねばならなかった。すなわち、戦いを放棄するまで何度も打ち負かされねばならなかった。平和の英雄たちに鼓舞されて、ほかの善良な国々は力を合わせた。素晴らしい連合だったので、結局彼らが勝ちを収めた。しかしそれは容易ではなかった。事態は終わりなき、ねばねばした厳しい戦闘に立ち至った。いつも新しい発明と、前代未聞の策略が執り行われた。この戦闘の最も重要なことは、死者が何度となく生き返ることだった。そのために発明され導入された特別の

呪文があった。突如すべての死者が、戦争をやめようとしないうる邪悪な一派の死者たちも、戦場から起きあがり再び生き返ると、6歳と8歳の弟たちには小さからぬ印象を与えた。この最後こそ、すべての物語のなかで重要だった。そして戦いという冒険的な数週間に何が起きようとも、勝利と栄光は、また物語手の本来の報酬は、すべての者が例外なく、復活し彼らの命を獲得する瞬間だった。

Kantonsschule 入学は、12歳にみたぬカネッティにとって、さまざまな人間認識の場になった。優秀な学友や教師に接することができた。級友のガンツホルンはラテン語で際だっていたし、ルートヴィヒ・エレンボーゲンはある知識で抜かんでいた。では教師はどうだったのか。

Die Vielfalt der Lehrer war erstaunlich, es ist die erste bewußte Vielfalt in einem Leben. Daß sie so lange vor einem stehen, in jeder ihrer Regungen ausgesetzt, unter unaufhörlicher Beobachtung, Stunde um Stunde wieder der eigentliche Gegenstand des Interesses, und da man sich nicht entfernen darf, immer für dieselbe, genau abgegrenzte Zeit; ihre Überlegenheit, die man nicht ein für allemal anerkennen will, die einen scharfsichtig und kritisch und boshaft macht; die Notwendigkeit, ihnen beizukommen, ohne daß man sich's gar zu schwer machen möchte, denn noch ist man kein ergebener, ausschließlicher Arbeiter geworden; auch das Geheimnis ihres übrigen Lebens, während der ganzen Zeit, die sie nicht als Schauspieler ihrer selbst vor einem dastehen; und dann noch die Abwechslung in ihrem Auftreten, daß einer nach dem anderen vor einem auftritt, am selben Ort, in derselben Rolle, in derselben Absicht, also eminent vergleichbar - das alles, wie es zusammenwirkt, ist noch eine ganz andere als die deklarierte Schule, eine Schule nämlich auch der Vielfalt von Menschen und wenn man sie halbwegs ernst nimmt, auch die erste bewußte Schule der Menschenkenntnis.

教師たちの多彩さは驚嘆すべきだったし、それは人生で初めて意識された多彩さである。教師たちがかくも長く人前に立つということ、ひとつひとつの動きを示しながら、途切れることのない観察のもとで、刻一刻と再び興味の本来の対象物たること、そしてその場から立ち去れないのだから、いつも同一の正確に区切られた時間なのである。これを最後としても認めたく

ない教師たちの卓絶さ、それは人を明敏に、批判的にまた悪辣にもする。教師たちに到達する必然性を、人はそれほど難しく考えもしない。なぜならまだ献身的な、本来の労働者自身になっていないのだから。それにまた教師たちの残りの生活の秘密。四六時中、教師たちは彼ら自身の俳優として人前に立つわけではない。それから更に教師たちの登場の交代。次から次へと人前に登場するという。同じ場所に、同じ役割で、同じ意図を抱いて、だからこそ顕著な比較の対象になる……そういったすべてが一緒になって作用を及ぼすのだから、布告されている学校とはまだまったく別の学校なのである。すなわち人間の多様性の学校でもある。そして半ば真面目に受け取るならば、人間性を知る最初の意識された学校でもある。

Da ich sie jetzt an mir vorüberziehen lasse, staune ich über die Verschiedenartigkeit, die Eigenart, den Reichtum meiner Züricher Lehrer. Von vielen habe ich gelernt, wie es ihrer Absicht entsprach, und der Dank, den ich für sie fühle, nach fünfzig Jahren, wird, sonderbar wie es klingen mag, von Jahr zu Jahr größer. Aber auch die, von denen ich nur wenig gelernt habe, stehen als Menschen oder Figuren so deutlich vor mir, daß ich ihnen eben dafür etwas schulde. Sie sind unverwechselbar, eine der Qualitäten, die im Rang zuallerhöchst steht; daß sie zugleich auch zu Figuren geworden sind, nimmt ihnen von ihrer Persönlichkeit nichts. Das Fließende zwischen Individuen und Typen ist ein eigentliches Anliegen des Dichters. (Verführung durch die Griechen. Schule der Menschenkenntnis)

私が今、彼ら教師たちが私の側を通り過ぎていくに任せてみると、チューリッヒの私の教師たちの多様さ、独自性、豊かさに驚かされる。私は多くの教師から、彼らの意図に応じて学んだ。そして私が彼らに抱く感謝の念は、50年経っても、奇妙に響くかもしれぬが年々大きくなる。しかし私がほとんど学ばなかった教師たちも、人間あるいは人物像としてはっきりと私の前に立っている。だからまさしくそのために、私は彼らに何か恩義がある。彼らは取り違えようがない。最高の位階に立つ特性のひとつなのである。彼らが同時に人物像にもなったということは、彼らからその人格を何一つ奪うわけではない。個人と典型の間の流動性は、詩人の本来的関心事なのである。

カネッティがギリシャ人の自由の戦いに熱狂したの

は12歳だったが、同じ年1917年はロシア革命の年でもあった。チューリッヒはさまざまな国からやって来た戦争反対者の中心地になっていた。母と連れだって、たまたま喫茶店の側を通り過ぎたとき、「あの人をよく見ておきなさい。あれがレーニンです。彼についておまえはさらに耳にすることがあるでしょう」と、母は述べた。

Wenige Monate später erzählte sie (Mutter) mir von der Ankunft Lenins in Rußland, und ich begann zu begreifen, daß es sich um etwas besonders Wichtiges handeln müsse. Die Russen hätten genug vom Morden, sagte sie, alle hätten genug vom Morden, und ob mit oder gegen die Regierung, jetzt werde es bald zu Ende sein damit. Sie nannte den Krieg nie anders als „das Morden“. Seit wir in Zürich waren, sprach sie ganz offen zu mir darüber, in Wien hatte sie sich zurückgehalten, um mir keine Konflikte in der Schule zu bereiten. „Du wirst nie einen Menschen töten, der dir nichts getan hat“, sagte sie zu mir beschwörend, und so stolz sie darauf war, daß sie drei Söhne hatte - ich spürte, mit welcher Sorge sie es erfüllte, daß wir auch einmal zu solchen „Mördern“ werden könnten. Ihr Haß gegen den Krieg hatte etwas Elementares: als sie mir einmal den Inhalt des >Faust< erzählte, den sie mir noch nicht zu lesen gegeben wollte, mißbilligte sie Fausts Pakt mit dem Teufel. Es gäbe nur eine Rechtfertigung für einen solchen Pakt: um dem Krieg ein Ende zu machen. Dafür dürfe man sich auch mit dem Teufel verbunden, sonst für nichts.

数ヶ月後、母は私にレーニンのロシア到着について語った。そこで私は、何か特別重要なことが問題であるに違いないと理解しはじめた。ロシア人は殺人に飽き飽きしていると母は述べた。誰もが殺人に飽き飽きしている。政府に同調しようが反対しようが、今や人殺しはすぐにも終結するだろうと。彼女は決して戦争を「殺人」以外の呼び方で呼ばなかった。私たちがチューリッヒに到着して以来、彼女は私に対してまったく隠し立てせずそのことを話した。ウィーンでは、私が学校で軋轢を起こさぬようにと、彼女は控え目だった。「おまえは、おまえに何もしなかった人間を決して殺したりしないでしょ」と、彼女は宣誓するように私に言った。そして息子が三人いることをとても誇りにしていた……私は、私たちもいつかそのような「殺人者」になるかもしれぬということ、彼女がどれほど憂慮しているかを感じ取った。彼女の戦争に

対する憎しみには、何か基本的なものがあつた。彼女は私に「ファウスト」をまだ読ませようとはしなかつたが、一度「ファウスト」の内容について私に語つたとき、ファウストの悪魔との契約を認めなかつた。そのような契約に対してただ一つ正当化できるとすれば、戦争を終結させるためだけだ。そのためなら悪魔と同盟を結んでもよいが、さもなければ何ものとも許されぬと。

夕べになると、母の知人たちがカネッティ家によく集まつた。ブルガリアやトルコのスパニオールで、彼らは戦争に追い立てられ、チューリッヒへ逃れてきたのである。大抵は夫婦連れだったが、そこには男やめめで、バルカン戦争のブルガリア将校アドユーベルなる人物もいた。

Man kann sich denken, wie die Mutter jeden Punkt seiner Argumentation ergriff und zerlöcherete. Im Grunde hatte sie alle gegen sich, denn wenn sie auch ein baldiges Ende des Krieges begrüßten - daß es durch die Aktivität der Bolschewiki in Rußland dazu käme, empfanden sie als gefährliche Bedrohung. Es waren alles bürgerliche Menschen, mehr oder weniger vermögend, die unter ihnen, die aus Bulgarien stammten, fürchteten das Übergreifen der Revolution dorthin, die anderen, die aus der Türkei waren, sahen den alten russischen Feind, wenn auch in neuer Verkleidung, schon in Konstantinopel. Der Mutter war das völlig gleichgültig. Für sie kam es nur darauf an, wer den Krieg wirklich beenden wollte. Sie, die aus einer der wohlhabendsten Familien Bulgariens stammte, verteidigte Lenin. Sie konnte keinen Teufel in ihm sehen wie die anderen, sondern einen Wohltäter der Menschheit.

いかに母が、彼の議論のどんな点も把握して穴だらけにしたか想像できる。結局のところ彼女は、皆と考えが反対だった。というのもし彼らが、間もなく戦争が終結することを歓迎したとしても……ロシアのボルシェヴィキの活動によってその事態が招来することを、彼らは危険な脅威と感じた。すべてが多かれ少なかれ財産ある中産階級の間人たちだった。彼らの中のブルガリア出身者は、かの地での革命の広がりをおそれていた。トルコから来ていた他の者は、新たな変装の装いにしろ、すでにコンスタンチノーベルで、あの古いロシアの敵を見ていた。そんなことは母には全くどうでもよかった。彼女にとってただ問題だったのは、

誰が戦争終結を本当に願っているかだった。彼女は、ブルガリアの最も裕福な家族のひとつの出身だったが、レーニンを擁護した。彼女は他の者と同じ、レーニンに悪魔を見ることはできなかった。人類の善行者を見たのである。

Herr Adjubel, mit dem sie eigentlich stritt, war der einzige, der sie begriff, denn er hatte selbst eine Gesinnung. Einmal fragte er sie, es war der dramatischste Augenblick all dieser Zusammenkünfte: „Und wenn ich ein russischer Offizier wäre, Madame, und entschlossen mit meinen Leuten gegen die Deutschen weiterkämpfen würde - würden Sie mich dann erschießen lassen?“ Sie zögerte nicht einmal: „Jeden, der sich dem Ende des Krieges entgegenstellt, würde ich erschießen lassen. Er wäre ein Feind der Menschheit.“ (Der Schädel. Disput mit einem Offizier)

彼女がそもそも論争したのはアドユーベル氏だったが、彼は彼女を理解した唯一の者だった。というのも彼自身信念を持っていたからである。彼は彼女に次のように尋ねたことがあつたが、それは、これらすべての集まりにおける最も劇的瞬間だった。「それでも私がロシアの将校であるとして、奥様、部下たちと断固ドイツ人に対する戦いを継続するとしたら……あなたは私を射殺する命令をお出しになるのでしょうか？」彼女は決して躊躇しなかつた。「戦争の終結に抵抗する者には、なにびとといえども射殺の命令を出すでしょう。そのような者は人類の敵なのですから。」

当時、母親はストリンドベルクの作品に夢中になっていたが、カネッティが読むことは禁じられていた。その代わりに、ディケンズの「オリヴァー・ツイスト」と「ニコラス・ニッケルバイ」が与えられた。

Als ich ihn (Nicolas Nickleby) fertig hatte, fing ich gleich nochmals von vorne an und las ihn von Anfang zu Ende wieder. Das geschah noch drei- oder viermal, wahrscheinlich häufiger. „Du kennst es doch schon“, sagte sie, „möchtest du jetzt nicht lieber ein anderes?“ Aber je besser ich es kannte, um so lieber las ich es wieder. Sie hielt das für eine kindliche Unsitte von mir und führte es auf die frühen Bücher zurück, die ich von meinem Vater hatte und von denen ich manches vierzigmal las, als ich sie schon längst auswendig kannte. Sie suchte mir diese Unsitte abzugewöhnen, indem sie mir neue Bücher verlockend schilderte,

von Dickens gab es zum Glück sehr viele. Den >David Copperfield<, der ihr Liebling war und den sie auch als das literalisch Beste betrachtete, sollte ich erst als letztes bekommen. Sie steigerte mächtig meine Begier darauf und hoffte, mir mit diesem Köder das ewige Wiederlesen der anderen Romane abzugewöhnen.

私はニコラス・ニッケルバイを読み終えると、すぐにもう一度前から読み始め、最初から終わりまで再び読んだ。それは更に3回、あるいは4回、多分もっと多く起きた。「おまえはすでにそれを知っているじゃないの」と彼女は言った。「今からほかの本を読みたくなるの？」しかしよく知れば知るほど、私は一層その本を繰り返し読みたくなるのだった。彼女はそれを私の子供らしい悪習だと見なし、以前の本のせいだと考えた。私が父からもらい、もうとっくに暗記しているのに、そんな本の多くを40回も読んだのである。彼女は新しい本の魅力を語りながら、私のこの悪習をやめさせようと努めた。ディケンズについては幸運にも数多くの本があった。彼女のお気に入り、彼女が文学的に最良と見なしていた「デイヴィッド・コッパフィールド」を、私はようやく最後の本として受け取るようになった。彼女は強力に、その本に対する私の好奇心を高めた。そしてこの餌で、他の小説を繰り返し再読し続ける私の悪習をやめさせることを望んだのである。

子供たちはおやつ代を節約しては、一冊の本が購入できる金額になると、母親に本をプレゼントした。ラツコー (Andreas Latzko) の「戦争の中の人間」、レオンハルト・フランク (Leonhard Frank) の「人間は善良なり」、バルビュス (Henri Barbusse) の「砲火」などだった。

Hungrig war ich, doch war es viel aufregender, dieses Geld zu sparen, bis genug da war, um der Mutter ein neues Buch zu schenken. Zuallererst war ich zu Rascher gegangen, um den Preis zu erfahren, und es war schon ein Vergnügen, diese immer belebte Buchhandlung am Limmatquai zu betreten, die Leute zu sehen, die oft schon nach unseren künftigen Geschenken fragten, und natürlich auch mit einem Blick all die Bücher zu erfassen, die ich später einmal lesen würde. Es war nicht so sehr, daß ich mir unter diesen Erwachsenen größer und verantwortlicher vorkam, als die Verheißung künftigen Lesestoffs, der nie ausgehen

würde. Denn wenn ich damals etwas wie Sorge um die Zukunft überhaupt kannte, so galt sie ausschließlich dem Bücherbestand der Welt. Was geschah, wenn ich alles gelesen hätte? Gewiß, ich las am liebsten wieder und wieder, was ich mochte, aber zur Freude daran gehörte die Gewißheit, daß mehr und mehr nachkommen würde.

私は空腹だったが、このお金を貯めるのは、やはりずっと刺激的なことだった。そしてついに、新しい本を一冊母にプレゼントできる十分なお金になった。何はともあれまず最初、私は値段を知るためラッシャーへ出かけた。このいつも活気あふれるリマ河岸の本屋に足を踏み入れることが、すでに楽しみだった。私たちの将来のプレゼントについて、すでに尋ねている人がよく見られた。そして当然ながら、私が後々読むことになるすべての書物を一目で見渡すのも楽しかった。それほど多くはなかったの、私は自分がこれら大人たちの中で、決して尽きることのない未来の読み物の約束よりも大きく、より責任あるように思えた。というのも、もし私が当時、未来に対する不安のようなものをそもそも知っていたとすれば、それはもっぱら世界の書物の存在数にかかわるものだった。もし私がすべて読んでしまえば、何が起きるだろうか？確かに、私は自分の好きなものを何度も何度も読むのが一番好きだった。しかしその喜びの一部となっているのは、ますます多くの本が後から後から現れるだろうという確信だった。

Ich erinnere mich daran, mit welcher Verachtung sie den >Jeremias< von Stefan Zweig abtat: „Papier! Leeres Stroh! Man sieht, daß er nichts selbst erlebt hat. Er sollte lieber den Barbusse lesen, statt dieses Zeug zu schreiben!“ Ihr Respekt vor wirklicher Erfahrung war ungeheuer. Sie hätte sich gescheut, den Mund über den Krieg, wie er sich faktisch abspielte, vor anderen aufzutun, denn sie war selbst nicht im Schützengraben gewesen; und sie ging so weit zu sagen, es wäre besser, wenn auch Frauen in den Krieg müßten, dann könnten sie ernsthaft gegen ihn kämpfen. So war es wohl, wenn es sich um die Dinge selbst handelte, auch diese Scheu, die sie davon abhielt, den Weg zu Gesinnungsgenossen zu finden. Geschwätzt, mündlich oder schriftlich, haßte sie ingrimmig, und wenn ich es wagte, etwas ungenau zu sagen, fuhr sie mir schonungslos über den Mund.

私は、彼女がどんな軽蔑の念でシュテファン・ツ

ヴァイクの「イエレミアス」を抹殺したかを覚えている。「紙切れ! 中味は空っぽ! 彼は何も自分で体験していないのがわかるわ。彼はこんなばかげたものを書く代わりに、むしろバルビュスを読むべきだわ!」彼女の現実的経験に対する畏敬は途轍もなかった。彼女は、戦争が実際にいかに進行したか、他人の前で口を開くことを厭っただろう。というのも、彼女自身が塹壕にいなかったのだから。そして彼女は極端まで進み、こう述べた。女性たちも出征しなければならないとすれば、彼女たちは真剣に戦争反対の戦いができるし、それはよりよいことだと。そんなわけでおそらく、事柄それ自体が問題になるとき、この嫌悪感も顔を出し、それが信念上の仲間を見つける道の邪魔になったのだろう。おしゃべりを、口頭であれ文章であれ、彼女は憤懣やるかたないほど憎んだ。そこでもし私があえて何か不正確なことを述べたりすると、情け容赦もなく私の話を遮った。

Es fällt mir schwer, nicht alles aufzuzählen, was sie beschäftigte. Denn was immer es war, etwas davon ging auf mich über. Nur mir konnte sie alles in jeder Einzelheit berichten. Nur ich nahm ihre strengen Urteile ernst, denn ich wußte, welcher Begeisterung sie entsprangen. Sie verdammt viel, aber nie, ohne sich über das zu verbreiten, was sie dagegen setzte und es heftig, doch überzeugend zu begründen. Zwar war die Zeit der gemeinsamen Lesungen vorüber, die Dramen und großen Darsteller waren nicht mehr der Hauptinhalt der Welt, aber ein anderer und keineswegs geringerer >Reichtum< war an ihre Stelle getreten: das Ungeheuerliche, das jetzt geschah, seine Auswirkungen und seine Wurzeln. Sie war eine mißtrauische Natur und fand in Strindberg, den sie für den gescheitesten aller Menschen hielt, eine Rechtfertigung für dieses Mißtrauen, an das sie sich gewöhnte, und das sie nicht mehr entbehren mochte. Sie erappte sich dabei, daß sie zu weit ging und mir Dinge sagte, die zur Quelle meines eigenen, noch sehr jungen Mißtrauens wurden. Sie erschrak dann und erzählte mir zum Ausgleich von einer Tat, die sie besonders bewunderte. Meist war es etwas, das mit unfaßbaren Schwierigkeiten verbunden war, aber Großmut spielte immer auch eine Rolle. Während solcher Ausgleichsbemühungen fühlte ich mich ihr am nächsten. Sie dachte, daß ich den Grund für diesen Wechsel im Ton nicht durchschaue. Aber ich war schon ein wenig wie sie

und übte mich im Durchschauen. Scheinbar naiv nahm ich die >edle< Geschichte auf, sie gefiel mir immer. Aber ich wußte, warum sie gerade jetzt die Sprache darauf brachte, und behielt dieses Wissen für mich. So hielten wir beide etwas zurück, und da es eigentlich dasselbe war, hatten wir jeder vorm andern das gleiche Geheimnis. Es ist nicht zu verwundern, daß ich sie in solchen Augenblicken, da ich mich ihr stumm gewachsen fühlte, am meisten liebte. Sie war sicher, daß sie ihr Mißtrauen wieder vor mir verhüllt habe, ich nahm beides wahr: ihre erbarmungslose Schärfe und ihren Großmut. Was Weite ist, wußte ich damals noch nicht, aber ich empfand sie: daß man so Vieles und Gegensätzliches in sich fassen kann, daß alles scheinbar Unvereinbare zugleich seine Gültigkeit hat, daß man es fühlen kann, ohne vor Angst darüber zu vergehen, daß man es nennen und bedenken soll, die wahre Glorie der menschlichen Natur, das war das Eigentliche, was ich von ihr lernte. (Tag- und Nachtlectüren. Das Leben der Geschenke)

私には、彼女に関わる一切のものを数え上げないのは難しく思える。というのも、それが常に何であれ、その何かが私に移ってきたからである。私にだけ、彼女はすべてを詳細に報告できた。私だけが彼女の厳しい判断を真面目に取った。それがどのような熱狂から出てくるかが、私にはわかっていたからである。彼女は多くのものを呪詛したが、しかし決して、反対するものについて詳しく述べないことはなかったし、激しく、だが確信を持ってその理由を述べた。なるほど一緒に読書する時代は過ぎ去った。ドラマや偉大な俳優たちは、もはや世界の主要な内容ではなかった。しかし別の、決して小さくない「富」がそれらに代わって登場した。つまり今になって生じた途轍もないもの、富の結果と富の根源である。彼女は疑い深い性質だった。そこで、彼女があらゆる人間の中で最も聡明だと見なしたストリンデルベルクに、この不信の正当化を見いだした。不信の念は彼女が慣れ親しんだもので、もはやそれなしで済ますのを好まなかった。彼女は余りに先へ進みすぎ、私自身のまだ若々しい不信の源になることを述べたが、そのことにはっと気づいた。その時、彼女は驚き、その埋め合わせに、彼女が特別感心していたある行為について私に語った。そのほとんどが、理解しがたい困難さと結びついた何かだった。しかし寛大さも常に役割を演じていた。そのような埋め合わせの努力の間、私は自分が彼女に最も身近だと感じた。彼女は、私がこの語調の変化の理由を見抜いて

いないと考えた。しかし私はすでに少々彼女と似ていたし、見抜くための練習もしていた。見た目には素朴に、私は「気高い」話を受け取った。私にはいつもそんな話が気に入った。しかし何故彼女がまさしく今、言葉をそこへ向けたかが私にはわかっていた。そこでこの知識は自分の胸だけに納めた。そんなわけで私たち二人は何かを抑制していたが、それは本来同一のものであったので、私たちそれぞれが他方と同じ秘密を抱えていた。私が彼女に沈黙するのが相応しいと感じるそのような瞬間、私が彼女を一番愛したというのは少しも不思議でない。彼女は、不信の念を再び私の前から隠し仰せたと確信していた。私は彼女の情け容赦のない辛辣さと、寛大さの両者を見て取った。広さが何か、当時の私はまだ知らなかった。しかしそれを感じ取った。人はかくも多様なもの、矛盾するものをみずからの内に収納できるということ。一見相容れないすべてのものが、同時にその妥当性を持つということ。人はそれらに対する不安のあまり減びることもなく、それを感じることができるといふこと。人はその名を名付け、それを思案すべきだということ。つまり人間の性質の真の栄光を。それが、私が彼女から学んだ本来のものだった。

母はよく音楽会へ出かけた。「マタイ受難曲」を聴いてからは、一週間読書すらできず、イロナ・ドゥリゴのアルトの音が耳を離れなかった。

Eines Nachts kam sie mit Tränen in den Augen zu mir ins Schlafzimmer und sagte: „Jetzt ist es aus mit den Büchern, ich werde nie mehr lesen können.“ Ich suchte sie zu trösten, ich schlug ihr vor, neben ihr zu sitzen, während sie lese, dann werde sie die Stimme nicht mehr hören. Das passiere doch nur, weil sie allein sei, wenn ich am Tisch drüben neben ihr säße, könne ich immer etwas sagen, dann würden die Stimmen vergehen. „Aber ich will sie doch hören, verstehst du nicht, ich will nie mehr etwas anderes hören!“ Es war ein so leidenschaftlicher Ausbruch, daß ich erschrak. Aber ich war auch voller Bewunderung dafür und verstummte. Während der folgenden Tage sah ich sie manchmal fragend an, sie verstand meinen Blick und sagte in einer Mischung von Glück und Verzweiflung: „Ich höre sie noch immer.“

ある夜、彼女は目に涙を浮かべ私の寝室へやって来ると、こう言った。「今や書物は駄目だわ。私はもう

決して本を読むことはできないでしょう。」私は彼女を慰めようと努めた。彼女が読書している間、彼女の隣りに座ることを提案した。そうすれば、声はもう聞こえないだろうと。彼女がひとりだからこそ、それが起きるのだ。もし私が向こうのテーブルの彼女の隣りに座れば、いつでも何か話すことができる。そうすれば声は消え去るだろうと。「だけど私はその声をやはり聞きたいのよ。おまえにはわからないの。私は決してもう何かほかのものは聞きたくないのよ！」それは激しい情熱的な爆発だったので、私は驚いた。しかし私はそのことに、まさしく感嘆もした。そして沈黙した。次の数日間、私は時々尋ねるような眼差しで彼女をじっと見つめた。彼女は私の視線を理解し、幸福と絶望の入り交じったような顔つきでこう言った。「あの声が相変わらず私に聞こえるわ。」

しばらくの間、母はルードルフ・シュタイナーの講演に出かけていた。その講演の報告が、まるで突然母が聞いたこともない言葉で話しているようにカネッティに思えた。シュタイナーには何か催眠術のようなものがあると、母がうっかり口を滑らしたとき、カネッティは彼について質問の雨を浴びせた。そこから判明したのは、ゲーテからの引用が頻繁で、このことによつてシュタイナーは母の心を掴んだということだった。

Ich fragte sie, ob ihr das denn neu sei, sie müsse das doch schon kennen, sie sage, sie habe alles von Goethe gelesen. „Weißt du, es hat ihn niemand ganz gelesen“, bekannte sie ziemlich verlegen, „und ich kann mich an nichts von diesen Sachen erinnern.“ Sie schien sehr unsicher, denn ich war es gewöhnt, daß sie jede Silbe ihrer Dichter kannte, eben für ihre mangelhafte Kenntnis eines Autors griff sie andere heftig an und nannte sie „Schwätzer“ und „Wirrköpfe“, die alles durcheinander brächten, weil sie zu faul seien, etwas bis auf den Grund zu erfahren. Ich gab mich mit ihrer Antwort nicht zufrieden und fragte weiter: ob sie nun möchte, daß ich auch diese Dinge glaube? Wir könnten doch nicht verschiedene Dinge glauben und wenn sie sich nach einigen Vorträgen Steiner anschleße, weil er so hypnotisch sei, dann würde ich mich dazu zwingen, jede Sache, die sie gesagt habe, auch zu glauben, damit uns nichts voneinander trenne. Es muß wie eine Drohung geklungen haben, vielleicht war es nur eine List: ich wollte in Erfahrung bringen, wie stark diese neue Macht sie gepackt hatte, die mir voll-

kommen fremd war, von der ich nichts gehört oder gelesen hatte, sie brach so plötzlich über uns herein, ich hatte das Gefühl, daß sie nun alles zwischen uns verändern werde. Am meisten fürchtete ich, daß es ihr gleichgültig sein könnte, ob ich mich ihr anschließe oder nicht, das hätte bedeutet, daß es ihr gar nicht mehr so wichtig wäre, was mit mir geschähe. Aber so weit war es keineswegs, denn von meiner „Beteiligung“ wollte sie nichts wissen, mit einer Heftigkeit sagte sie: „Du bist zu jung dazu. Das ist nichts für dich. Du sollst nichts davon glauben. Ich werde dir nie mehr etwas darüber erzählen.“

それは一体あなたにとって新しいことなのかどうかと、私は彼女に尋ねた。だってそれをすでに知っているに違いないし、ゲーテのすべてを読んだと言っているのではないかと。「いいこと、誰もゲーテを全部読んだ者はいないわ」と、彼女はかなり当惑しながら白状した。「それに私はこの問題では何も思い出すことができない。」彼女はとても自信がなさそうに見えた。というのも彼女は、彼女の詩人たちのどんな言葉も知っていることに、私は慣れていたのである。他人がある著者について知識がまさしく不十分であれば、彼女は激しく彼らを攻撃した。彼らは余りに怠け者だから、物事の根底まで知ることがなく、すべてを混乱させる「お喋り」で「頭のおかしい連中」などと呼んだ。私は彼女の返事に満足できず、更に尋ねた。私もこの問題を信じることを、今では彼女も願っているのかどうかと。だって私たちは違うものを信じることはできないにちがいない。そこでもし彼女が何度か講演を聴いた後で、シュタイナーが非常に催眠術的だから彼に従うのであれば、私は無理をしてでも、彼女が述べるとんなことも信じるだろう。何ものも、私たちを互いに引き離さないためにと。それは脅迫のように響いたかもしれない。ひょっとするとそれは単なる悪知恵だったかもしれない。私は、どれほど強くこの新しい力が彼女の心を掴んだかを知りたかった。私には完全に疎遠だった力、私が何一つ聞いたこともなければ読んだこともなかった力が、かくも突如として私たちの上に降りかかった。私は、彼女が今や、私たちの間のすべてを変えようとしているという感情を抱いた。私が一番恐れたのは、私が彼女に従おうが従うまいが、それは彼女にはどうでもよいということだった。つまりその意味するところは、私に何が起きようが、それは彼女には全く、もう大して重要でないということになるだろう。しかしことは決してそれほど先へは進ま

なかった。というのも、私の「関与」について、彼女は何も知ることを望まず、激しくこう述べたのである。「おまえはそれには若すぎます。これはおまえにとっては何でもありません。おまえはそれについては何も信じるべきではない。おまえにはもう決してそのことについて何か語ることはしません。」

Was aber soll ich über diese Eifersucht denken? Ich kann sie weder billigen noch verdammen, ich kann sie nur verzeichnen. Sie war so früh ein Teil meiner Natur, daß es Fälschung wäre, darüber zu schweigen. Sie hat sich immer gemeldet, wenn ein Mensch mir wichtig wurde, und nur wenige unter solchen gab es, die nicht darunter zu leiden hatten. Sie bildete sich reich und vielseitig aus in der Beziehung zur Mutter. Sie ermöglichte es mir, um etwas zu kämpfen, das in jeder Hinsicht überlegen war, stärker, erfahrener, kenntnisreicher und auch selbstloser. Es fiel mir gar nicht ein, wie selbstsüchtig ich in diesem Kampf war, und wenn mir jemand damals gesagt hätte, daß ich die Mutter unglücklich mache - ich wäre sehr erstaunt gewesen. Sie war es ja, die mir dieses Recht auf sich gab. Sie schloß sich mir aufs engste in ihrer Einsamkeit an, weil sie niemanden kannte, der ihr gewachsen gewesen wäre. Hätte sie mit einem Mann wie Busoni Umgang gehabt, es wäre um mich geschehen gewesen. Ich war ihr darum verfallen, weil sie sich mir ganz darstellte, alle wichtigen Gedanken, die sie beschäftigten, teilte sie mir mit und die Zurückhaltung, mit der sie manches meiner Jugend wegen verdeckte, war eine scheinbare. Alles Erotische enthielt sie mir hartnäckig vor, das Tabu, das sie auf dem Balkon unserer Wiener Wohnung darauf gelegt hatte, blieb so wirksam in mir, als wäre es am Berg Sinai von Gott selbst verkündigt worden. Ich fragte nicht danach, es beschäftigte mich nie und während sie mich feurig und klug mit allen Inhalten der Welt erfüllte, blieb das eine ausgespart, das mich verwirrt hätte. Da ich nicht wußte, wie sehr Menschen diese Art der Liebe brauchen, konnte ich auch nicht ahnen, was sie entbehre.

しかし私はこの嫉妬についてどう考えるべきだろうか? 当然だと認めることもできなければ、呪詛することもできない。ただ書き留めることができるだけである。嫉妬は早くから私の性質の一部だったから、それについて沈黙するのは誤魔化しになるだろう。ある人間が私に重要になると、いつも嫉妬心が姿を見せた。だからこの嫉妬心に悩まされなかった人は、そういう

人々の中のほんの僅かにすぎなかった。嫉妬は母への関係において豊富に、多面的に出現した。私はこの嫉妬心によって、どこから見ても優れたもの、より強く、より経験豊かで、より博学でしかも無私であるものと戦うことができた。私がこの戦いでいかに利己的だったか、自分では全然思い当たらなかった。だから、私が母を不幸にしていると、もし誰かが当時私に述べていれば……私はとても驚いたろう。この自分への権利を与えたのは、やはりほかでもない彼女だった。彼女は彼女と比べて遜色ない人間を誰も知らなかった。だからこの孤独の中で、私ときわめて緊密な仲間意識を作り上げた。もし彼女がブゾーニのような男性と交際していたら、私にそのチャンスはなかったろう。彼女は自分自身のすべてを私に描いて見せたから、私は彼女の虜になった。彼女が関わっていた重要な考えをすべて私に伝えた。だから慎み深さも外見上のものだった。私の若さ故に、彼女は少なからぬことを慎み深く隠したが。性愛に関わることはすべて、頑固なくらい私に知らせなかった。彼女が私たちのヴィーンの住居のバルコニーで封印したタブーは、まるでシナイ山で神自身によって告知されたかのように、私の胸中で効力を保持していた。私はそれを尋ねなかったし、それに関わりを持つことは決してなかった。私が彼女の情熱的で賢明な、世界のあらゆる内実で満たされている間、私を混乱させたであろうそのひとつのタブーは、空白のままに留まった。人間がどれほど多大にこういう種類の愛を必要とするかを、私は知らなかったから、彼女にそれが欠けていることを予感することもできなかった。

Eine zweite Wohltat, die mir die Mutter während dieser gemeinsamen Züricher Jahre erwies, hatte noch größere Folgen: sie erließ mir die Berechnung. Ich bekam nie zu hören, daß man etwas aus praktischen Gründen tue. Es wurde nichts betrieben, was >nützlich< für einen werden konnte. Alle Dinge, die ich auffassen mochte, waren gleichberechtigt. Ich bewegte mich auf hundert Wegen zugleich, ohne hören zu müssen, daß dieser oder jener bequemer, ergiebiger, einträglicher zu befahren sei. Es kam auf die Dinge selber an und nicht auf ihren Nutzen. Genau und gründlich mußte man sein und eine Meinung ohne Schwindeleien vertreten können, aber diese Gründlichkeit galt der Sache selbst und nicht irgendeinem Nutzen, den sie für einen haben könnte. Es wurde kaum darüber gesprochen,

was man einmal tun würde. Das Berufliche trat so sehr zurück, daß einem alle Berufe offenblieben. Erfolg bedeutete nicht, daß man für sich selber weiterkam, der Erfolg kam allen zugute, oder es war keiner. Es ist mir rätselhaft, wie eine Frau ihrer Herkunft, des kaufmännischen Ansehens ihrer Familie wohl bewußt, voller Stolz darauf, es nie verleugnend, es zu dieser Freiheit, Weite und Uneigennützigkeit des Blickes gebracht hatte. Ich kann es nur der Erschütterung durch den Krieg zuschreiben, der Teilnahme für alle, die ihre kostbarsten Menschen an ihn verloren, daß sie ihre Grenzen plötzlich hinter sich ließ und zur Großmut selbst wurde, für alles, was dachte, fühlte und litt, wobei die Bewunderung für den leuchtenden Vorgang des Denkens, das jedem gegeben war, den Vorrang hatte. (Hypnose und Eifersucht. Die Schwerverletzten)

一緒に過ごしたこのチューリッヒ時代、母が私に示した二番目の善行は、更にいっそう大きな結果をもたらした。私から打算を免じたのである。人は実際的な理由から何かをするというのを、私が聞くことは決してなかった。何が人にとって「有益に」なりうるかについては、何も催促されなかった。私が理解したいと思うものすべてが、同じように正当だった。私はあちらが、あるいはこちらの道がより快適で、より有益で、より有利に辿ることができるなどと耳にする必要もなく、百通りの道を同時に進んだ。物事それ自体が問題で、その有用さは問題にならなかった。人は正確で徹底的であらねばならず、まやかしの意見を発表できねばならなかった。しかしこの徹底性も問題自身に妥当することで、何らかの有用さには、徹底性が人にとって持ちうるような有用さには当てはまらなかった。人が将来何をするかについては殆ど話されなかった。職業的なものは全く問題にならなかったから、あらゆる職業への道が開かれていた。成功は、人が自分自身のために前進することを意味しなかった。成功はすべての者に役立つものだった。さもなければ成功でなかった。私に謎めいて見えるのは、どうして彼女のような出自の女性が、家族の商人としての名声を恐らく意識し、まさしくそれを自慢しながら、それを決して否認することなく、このような視線の自由や広さや我欲のなさに到達できたかということである。私はそれをただ戦争による精神的打撃、最も貴重な人間を戦争で失った人々すべてに対する同情心のせいだということができる。その結果、彼女は突如として彼女の限界を踏み越え、寛大そのものになった。考え、感じ、悩

むすべてに対して同情の念を抱いたが、その際、誰にも与えられていた思考の輝くばかりの過程に対する感嘆が優位を占めたのである。

ヴァルター・ヴレッシュナーは心理学の教授の息子だったが、カネッティは彼と文学上の友情を結んだ。彼の関心と興味はヴェデキントだったし、カネッティはディケンズの「デヴィッド・コッパーフィールド」に熱中していた。1919年7月、学校中の生徒が参列して、ゴットフリート・ケラー生誕百年記念祭が教会で執り行われた。二人は、彼がチューリッヒの詩人だったこと以外、何も知らなかった。カネッティの母も彼の作品のひとつとして知らなかった。

Die Predigerkirche war gesteckt voll, es herrschte eine feierliche Stimmung. Es gab Musik und dann kam eine große Rede. Ich weiß nicht mehr, wer sie hielt, es muß wohl ein Professor von unserer Schule gewesen sein, aber keiner von unseren eigenen. Ich weiß nur, daß er sich immer mehr in die Bedeutung Gottfried Kellers hineinsteigerte. Wreschner und ich wechselten verstohlen ironische Blicke. Wir glaubten zu wissen, was ein Dichter sei, und wenn wir von einem nichts wußten, war es eben keiner. Aber als der Redner immer größere Ansprüche für Keller machte, als er so von ihm sprach, wie ich es gewohnt war von Shakespeare, Goethe, Victor Hugo, von Dickens, Tolstoi und Strindberg zu hören, packte mich ein Entsetzen, wie ich es kaum zu beschreiben vermag, so als ob man das Höchste, was es auf der Welt gab, den Ruhm der großen Dichter, entheiligt habe. Ich wurde so zornig, daß ich am liebsten etwas dazwischengerufen hätte. (Die Gottfried-Keller-Feier)

伝導教会はぎっしりと詰まり、厳かな雰囲気支配していた。音楽が奏でられ、それから偉大な講演が続いた。誰が講演者だったか、私はもう覚えていない。おそらく私たちの学校の教授だったに違いない。しかし私たち自身の教授ではなかった。彼がゴットフリート・ケラーの意義にますます踏み込んでいったのだけは覚えている。ヴレッシュナーと私はこっそり皮肉な眼差しを交わし合った。私たちは詩人が何者かを知っていると思っていた。もし私たちがある詩人について何も知らなければ、まさしくそれは詩人ではなかった。しかし講演者はケラーのためにますます偉大な主張をした。私がシェークスピア、ゲーテ、ヴィクトル・ユー

ゴー、ディケンズ、トルストイやストリンドベルクについて耳に親しく聞いていたように、彼がケラーについて話したとき、私はほとんど書き記せないような驚きの念に包まれた。まるでこの世界に存在する最高のもの、偉大な詩人たちの名声の神聖さが汚されているようだった。私の腹立ちは極まり、話に割りこんで何か叫び声をあげるのも厭わなくらいだった。

第4章の最後では母親の弱り果てた姿が描き出される。1918年から翌年の冬にかけて猖獗を極めたインフルエンザにかかった母は、病状を悪化させ精神的にも衰弱していた。

Sie kniete nachts nicht mehr auf ihrem Stuhl, den Kopf in die Faust gestützt, der hohe Stoß gelber Bücher, den ich wie früher vorbereitet hatte, blieb unberührt, Strindberg war in Ungnade. „Ich bin zu unruhig“, sagte sie, „er deprimiert mich, ich kann ihn jetzt nicht lesen.“ Nachts, wenn ich schon im Zimmer nebenan zu Bette lag, setzte sie sich ganz plötzlich ans Klavier und spielte traurige Lieder. Sie spielte leise, um mich nicht zu wecken, wie sie dachte, summte noch leiser dazu und dann hörte ich sie weinen und mit meinem Vater sprechen, der nun sechs Jahre tot war.

彼女が夜、頭を拳で支えながら、片肘ついて椅子に座ることはもうなかった。私が以前のように準備していた高い、黄色い書物の山は、触れられぬままだった。ストリンドベルクは寵愛をなくしていた。「私は不安でたまらない」と彼女は言った。「彼は私を意気消沈させる。今では彼を読むことはできない。」夜、私がすでに隣室のベッドに横たわっていると、彼女は突如ピアノの椅子に腰を下ろし、物悲しい歌曲を演奏した。彼女は私を起こさないようにそっと演奏した。彼女が考え事をしながら、口ずさむ様子ももっと小さな音で聞こえた。そしてその時、私は彼女が泣きながら父と話しているのを耳にした。今や父が亡くなり6年が経過していた。

弟たちはローザンヌの小学校の寄宿舎に入り、フランス語に磨きをかければ良かったが、カネッティはカントンスシューレのリアルギムナジウムからの転校を望まなかった。従ってチューリッヒに留まり、寄宿舎にはいるしかなかった。母はヴィーンで専門医の徹底した検査を受け、その後、一年以上の長期療養を余儀なくされる事態が起きるかもしれない。

Ich begann, wenn auch noch unklar, zu begreifen, daß das Abbröckeln ihrer Gesundheit, ihrer Klarheit und Festigkeit, ihrer Gesinnung für uns mit dem Ende des Krieges, den sie doch so leidenschaftlich gewünscht hatte, und dem Zusammenbruch Österreichs zusammenhing.

Wir hatten uns mit dem Gedanken der kommenden Trennung abgefunden, als wir noch einmal zusammen nach Kandersteg fuhren, für den Sommer. Ich war es gewohnt, mit ihr in großen Hotels zu sein, seit ihrer frühen Jugend ging sie in keine anderen. Sie mochte die gedämpfte Atmosphäre, die Höflichkeit, mit der man bedient wurde, die wechselnden Gäste, die man vom eigenen Tisch aus während der Table d'Hôte ohne zu auffällige Neugier betrachten konnte. Zu uns mochte sie über alle diese Leute sprechen, sich in Vermutungen über sie ergehen, zu bestimmen versuchen, welcher Herkunft sie waren, sie leise mißbilligen oder hervorheben. Sie war der Meinung, daß ich auf diese Weise etwas von der großen Welt erfahre, ohne ihr zu nahe zu kommen, denn dazu sei es zu früh.

私は、まだ明確ではなかったが、彼女が健康を損ね、明晰さや堅固さ、私たちに対する彼女の信念の瓦解などが、何と云っても彼女が激しく願っていた戦争の終結や、オーストリアの崩壊と関係あることを理解しはじめた。

私たちがもう一度、夏の予定で、一緒にカンダーシュテークへ出かけたとき、私たちは来るべき別離の考えに折り合いをつけていた。私は彼女と大きなホテルへ行くことに慣れていて、彼女は青春時代の早くから、他のホテルに行くことはなかった。彼女はその和らいだ雰囲気、丁寧な応待と移り変わる客たちが好きだった。定食を取っている間、自分のテーブルから特別人目を引く好奇心を見せずに客を観察できたのである。彼女は客たちすべてについて、私たちに話すのが好きだった。彼らを勝手に想像しながら、どんな出自かを決めようとしたり、彼らを小声で非難しあるいは称揚するのが好きだった。彼女の意見では、私がこういう方法で、近寄りすぎることなく、大きな世界の何かを見聞しているということだった。というのも、その世界に近づくには早すぎるからということだった。

Hier in Kandersteg kam es zu einem Ausbruch der Mutter, der mir mehr als ihre Schwächezustände, mehr als alle unsere Beratungen in Zürich bewies, wie unheimlich die

Dinge waren, die in ihr vorgingen. Eine Familie aus Mailand traf im Hotel ein: die Frau eine schöne und tüppige italienische Gesellschaftsdame, der Mann ein Schweizer Industrieller, der schon lange in Mailand lebte. Sie hatten einen leibeigenen Maler, Micheletti mit sich - „ein berühmter Maler“, der nur für die Familie malen durfte und immer von ihr bewacht wurde: ein kleiner Mann, der sich so aufführte, als trüge er leibliche Fesseln, dem Industriellen für sein Geld, der Dame für ihre Schönheit hörig. Er bewunderte die Mutter und machte ihr eines Abends beim Verlassen des Speisesaals ein Kompliment. Er wagte es zwar nicht, ihr zu sagen, daß er ihr Porträt malen möchte, doch hielt sie es für sicher und sagte, als wir im Lift zu uns hinauffuhren: „Er wird mich malen! Ich werde unsterblich!“ Dann ging sie in ihrem Hotelzimmer oben auf und ab und wiederholte: „Er wird mich malen! Ich werde unsterblich!“ Sie konnte sich nicht beruhigen, noch lange - die >Kinder< waren schon schlafen gegangen - blieb ich mit ihr auf, sie war nicht imstande, sich zu setzen, wie auf einer Bühne ging sie unaufhörlich im Zimmer auf und ab, deklamierte und sang und sagte eigentlich nichts, nur immer wieder in allen Tonarten: „Ich werde unsterblich!“

このカンダーシュテークで母の爆発的事態が生じた。その爆発は彼女の衰弱状態より多くのことを、私たちのチューリッヒにおけるあらゆる相談より多くのことを私に立証した。彼女の心に生じたものは、なんと不気味だったことか。あるミラノからの家族がホテルに到着した。女性は美しい、豊満なイタリア社交界の婦人で、男性は、すでに長くミラノで暮らしていたスイス人実業家だった。彼らは奴隷のような画家、ミケレティを引き連れていた……「有名な画家」はただ家族のためだけに描くことを許され、いつも家族に監視されていた。小さな男は、まるで肉体上の手枷足枷をはめられているように振る舞った。実業家には金銭面で、婦人にはその美しさに隷従していた。彼は母を賛美し、ある晩、食堂を去るとき彼女にお世辞を言った。彼はなるほど、彼女の肖像を描きたいと敢えて口にしたわけではなかったが、母はそれを確かなことと取った。そして私たちがエレベーターで上へあがったとき、こう言った。「彼は私を描くでしょう！私は不滅になるわ！」それから彼女は上階のホテルの部屋であちこち歩き回り、こう繰り返した。「彼は私を描くでしょう！私は不滅になるわ！」彼女は落ち着くことができなかった。まだ長いこと……「子供たち」はずでにベッ

ドに入っていた……私は彼女と起きていた。彼女は腰を下ろすことができず、舞台上のように、部屋の中を絶え間なくあちこち歩き回った。朗読し、歌い、そしてそもそも何も語っていなかった。あらゆる調子でただただ何度となく繰り返すだけだった。「私は不滅になるわ！」

Ich suchte sie zu beruhigen, ihre Aufregung befremdete und erschreckte mich. „Aber er hat dir doch gar nicht gesagt, daß er dich malen will!“ „Mit den Augen hat er’s gesagt, mit den Augen, mit den Augen! Er konnte es doch nicht aussprechen, die Dame stand dabei, wie hätte er’s sagen sollen! Sie bewachen ihn, er ist ihr Sklave, er hat sich ihnen verschrieben, für eine Rente hat er sich verschrieben, alles was er malt, gehört ihnen, sie zwingen ihn zu malen, was sie wollen. Ein großer Künstler und so schwach! Aber mich will er malen. Er wird den Mut dazu finden und es ihnen sagen! Er wird ihnen drohen, daß er nie wieder etwas malt! Er wird es erzwingen. Er wird mich malen und ich werde unsterblich!“ Dann ging es wieder los, der letzte Satz als Litanei. Ich schämte mich für sie und fand es erbärmlich, und als der erste Schrecken vorüber war, wurde ich zornig und griff sie auf jede Weise an, bloß um sie zu ernüchtern. Sie sprach nie über Malerei, es war die eine Kunst, die sie kaum interessierte, von der sie nichts verstand. Um so beschämender war es, wie wichtig sie ihr plötzlich wurde. „Du hast doch kein Bild von ihm gesehen! Vielleicht würde es dir gar nicht gefallen, was er malt. Du hast doch noch nie seinen Namen gehört. Woher weißt du, daß er so berühmt ist?“ „Sie haben’s selber gesagt, seine Sklavenhalter, sie haben sich nicht gescheut, es zu sagen: ein berühmter Porträtmaler aus Mailand, und halten ihn gefangen! Er schaut mich immer an. Er schaut von ihrem Tisch immer zu mir herüber. Er schaut sich die Augen nach mir aus, er kann nicht anders. Er ist ein Maler, es ist eine höhere Gewalt, ich habe ihn inspiriert und er muß mich malen!“

私は彼女を落ち着かせようと試みた。彼女の興奮は私の知らないもので、私を驚かせた。「だけど彼は、あなたを描きたいとは全然あなたに言っていないでしょう！」「眼差しで彼はそれを言ったのよ、眼差しで、眼差しで！だって彼はそれが言えなかったのよ。婦人がその場にいたでしょう。どうして彼はそれを口に出せたでしょう！彼らは彼を見張っている。彼は彼らの奴隷だわ。彼は彼らに魂を売り渡したのよ。お金

のために我が身を売り渡したのよ。彼が描くのは彼らのものだわ。自分たちが望むものを、無理矢理彼に描かせるのよ。偉大な芸術家もかくも弱いのだわ！しかし彼は私を描きたいのよ。彼はその勇気を見だし、そのことを彼らに言うでしょう！彼は決して二度と何かを描くことはない、彼らを脅迫するでしょう！彼はそれを強行するでしょう。彼は私を描くでしょう。そして私は不滅になるわ！」それから事がまた始まった。最後の文章が連禱のように。私は彼女を恥ずかしく思った。それを哀れだと思った。最初の驚きが過ぎ去ると、私は腹を立て、ただただ彼女の迷いを覚ますために、あらゆる方法で彼女を攻撃した。彼女が絵画について話したことは決してなかった。それはほかでもない、ほとんど彼女の興味を引かぬ、彼女が何も理解しない芸術だった。その芸術が突然彼女にとって重要になったのは、いっそう恥ずべきことだった。「だってあなたは彼の絵を見ていないじゃありませんか！ひょっとすると、彼の描くものが、あなたは全然気に入らないかもしれない。だってあなたはまだ彼の名前を聞いたことは一度もないでしょう。彼がそんなに有名だと、どうして知っているんですか？」「彼らがそのことをみずから言ったのよ、奴隷所有者たちが。彼らは憚ることなく、そう言ったのよ。ミラノ出身の有名な肖像画家だと。そして彼を捕らえているのよ！彼はいつも私をじっと見つめているわ。彼は彼らのテーブルから、いつもこちらの私の方を見ているわ。彼は自分の目で、私を待ち受けているのよ。他のことはできないのだわ。彼は画家なのよ。それは不可抗力だわ。私が彼に靈感を与えたのだわ。彼は私を描くに違いないわ！」

„Du glaubst, ich bin verrückt. Du hast dein ganzes Leben vor dir. Mein Leben ist zu Ende. Bist du ein alter Mann, daß du mich nicht verstehst? Ist dein Großvater in dich gefahren? Er hat mich immer gehaßt. Aber dein Vater nicht, dein Vater nicht. Wäre er am Leben, er würde mich jetzt vor dir schützen.“

Sie war so erschöpft, daß sie zu weinen anfang. Ich umarmte sie und streichelte sie und gestand ihr aus Mitleid das Bild zu, das sie sich ersehnte. „Es wird sehr schön sein. Du mußt allein darauf sein. Du ganz allein. Alle Leute werden es bewundern. Ich werde ihm sagen, daß er dir’s schenken muß. Aber besser wär’s, es kommt in ein Museum.“ Dieser Vorschlag gefiel ihr und sie beruhigte sich

allmählich. Aber sie fühlte sich sehr schwach, ich half ihr zu Bett. Ihr Kopf lag matt und erschöpft auf dem Kissen. Sie sagte: „Heute bin ich das Kind und du die Mutter“, und schlief ein. (Wien in Not. Der Sklave aus Mailand)

「おまえは、私が狂っていると思っているんですよ。おまえには十分すぎる未来があるわ。私の生涯は終わったのよ。おまえは私を理解できないほど年寄りになったの？おまえの祖父がおまえに乗り移ったの？彼はいつも私を憎んでいました。しかしおまえの父は違うわ。おまえの父は違うわ。もし彼が生きていたら、今おまえから私を守ってくれるでしょう。」

彼女は疲れ果て、泣き始めた。私は彼女を抱擁し、彼女を撫でさすった。そして同情から、彼女がみずから待ちこがれた肖像画を認めた。「それはとても素晴らしいものになるでしょう。あなたは一人で描いてもらわなくては。あなた一人だけで。すべての人々がそれを賛嘆するでしょう。私は彼に言います。彼がその絵をあなたに贈呈しなければならぬと。しかしその絵は美術館に納めるのがもっといいかもしれない。」彼女はこの提案が気に入った。そこで次第に落ち着きを取り戻した。しかし彼女は弱々しい自分を感じていた。私は彼女がベッドにはいるのを手伝った。彼女の頭はぐったりと疲れ果て枕に横たわった。彼女はこう言った。「今日は私が子供で、おまえが母親だわ」、そして眠り込んだ。

われわれは第4部のチューリッヒ時代を、母の再婚話とそれに抵抗するカネッティの強い意志を語ることによって始めた。一般的な母と子の関係からは想像できぬこの二人の関係は、単なる自伝的物語の母子関係の枠組みを遙かに越えて、一見すると特別な解釈を要求するように見える。閉じられた世界への外からの侵入者に対して、強い防御態勢を敷く年少のカネッティの基本的戦略を司るものは、生来の激しい嫉妬心だけだろうか。シュタイナーの講演に傾倒するかに思える母親に向かって、少年には考えつけない狡猾な戦術を語らせるのは、もちろん現に自伝を書き進める老齡の著者でもあろう。ヴィーン大学の「講師先生」との対決とその勝利、母の読書世界にしか存在せぬシュニツラーとの絶望的戦いは、父親不在から生じる母と子の緊密で強い精神的絆だけを拠り所にしては理解しがたいものを隠しているかもしれない。

例えば性愛上の「タブー」の問題も、著者の記述だけからは、疑い深い読者には納得できかねよう。父の

死後6年を経て、母は精神的にも肉体的にも衰弱の度を強めているのは間違いない。しかしそれは戦争の影響と並はずれた母親の同情心だけから理解できようか。信念に生きる母親の強い姿勢、コロランがお気に入りである彼女と相容れぬこの弱さは、どこから招来するものなのか。

1914年7月28日、オーストリア・ハンガリー南部国境の局地戦争として始まった戦いは、ヨーロッパを全面的に巻き込んだ大戦となったが、この第一次大戦が四年以上も続くとは誰も想像できなかった。カネッティの記述ではこの戦争の現実的実相は意図的に部分的影響としてのみ出現するが、それも無理からぬことであろう。幼い子供として母を通して体験する外部の戦争は、奇妙にもエピソード的刻印を残しているにすぎない印象を与える。

しかしこういうさまざまな疑念を払拭できぬからといって、「救われた舌」の根本をなす誠実といえる記述の価値が減ずるわけではない。もともとカネッティの知的で情緒豊かな物事の感受性は、この自伝で陰鬱でショッキングな否定的世界の絶望を記述しようとしているわけではない。自伝から立ち昇るある意味で楽天的な、崇高な品位は自己の疑念や絶望ばかりに目を向けず、常に新たな肯定的世界を目指していると考えべきではなからうか。何故ならすでに「眩暈」の中の絶望から立ち直った老齡のカネッティが「救われた舌」で記述するものは、あの若き日の青年が実感する世界とは別物だからである。

幼少で父親を失う経験は、それも自由な仕事の選択を子供に語りかける優しい父の喪失は、何ものによっても埋め合わせできぬ白いカーテンのように、生涯、胸の内に痕跡をとどめ、悲哀感とともに揺れ続けるであろう。そこから意を決して立ち上がり、前に向かって進むには、未来を展望する断固たる肯定性が要求される。しかもこの少年は読書狂としてあらゆる知識の広大な世界を駆け回り、書く人たる作家として自立していく道を選び取る。

第4部の最後で、弱り果てた母の姿からカネッティが作り上げる不滅を願う母の姿は、確かに精神的驚愕を与えるに十分である。描写されるこの母の姿は、成熟したカネッティの筆によって、それまでの強い通常の母親像からは随分とかけ離れたように見える。自制心を失い、本人も言うように、気が狂ったように自分が不滅の姿となって永遠に生き続ける願望は、カネッティの巧みな描写によって生き生きとした像を提供す

る。まさしく不滅の母、不滅の人物像として後々の世代に残るとすれば、それは作家たる老齢の文筆家カネッティの腕次第なのだ。そしておそらく母の願いは成就されたのである。なぜなら「救われた舌」は多くの読者を魅了し、その女主人公に相応しい母の姿としてすべてが提示され、一人の素晴らしい作家、詩人を生み出した典型的な母親像として、自伝の中で決して死に絶えることはないからである。

この最後の場面には、母親の精神的な虜になって、母の考えをすべて自分のものとしたあのカネッティとは別の人物が仮託されている。単に一時的に母と子の役割を取り替えただけではない。仮の対等な関係、これまでの従属した関係から抜け出て、新たな未来の、お互い自立した関係によって母と向き合う少年をわれわれは想像できる。いやもっと成長した青年となって、母親の懐から離れていく主人公すら登場することになるであろう。なぜならカネッティが求める世界は、遙かに母の文化的文学的世界よりも広大で広範囲のものとなるからである。所持する時間的未来の長さだけでなく、実際に交際し、認め合う人間の豊かさや質的多量さが、彼をして母親の女性的、問題を孕む世界観とは当然齟齬を来すことになるはずだからである。というより、母親との関係から学び取った人間的認識の深さ、広さによって、彼はさらなる複雑な関係の網の目をくぐり抜けて行くはずである。母の情熱から湧き出る言葉を耳にしなが、無限の書物を読み尽くそうとする少年のように、さまざまな人間との出会いを求め、まっすぐな作家としての道を進んでいくことは間違いないだろう。

(次稿に続く)

TEXT

Die gerettete Zunge (Geschichte einer Jugend).

Fischer Taschenbuch Verlag, Band 2083, 1979

Teil 1 (Rustschuk) 1905-1911

Meine früheste Erinnerung

Familienstolz

>Kako la gallinica<. Wölfe und Werwölfe

Das Beil des Armeniers. Die Zigeuner

Geburt des Bruders

Das Haus des Türken. Die beiden Großväter

Purim. Der Komet

Die Zaubersprache. Das Feuer

Kreuzottern und Buchstaben

Der Mordanschlag

Ein Fluch auf die Reise

Teil 2 (Manchester) 1911-1913

Tapeten und Bücher. Spaziergang an der Mersey

Little Mary. Der Untergang der Titanic. Captain Scott

Napoleon. Menschenfressende Gäste. Sonntagsfreuden

Der Tod des Vaters. Die letzte Version

Das himmlische Jerusalem

Deutsch am Genfersee

Teil 3 (Wien) 1913-1916

Das Erdbeben von Messina. Burgtheater zuhause

Der Unermüdliche

Ausbruch des Kriegs

Medea und Odysseus

Reise nach Bulgarien

Die Auffindung des Bösen. Festung Wien

Alice Asriel

Die Wiese bei Neuwaldegg

Krankheit der Mutter. Der Herr Dozent

Der Bart im Bodensee

Teil 4 (Zürich-Scheuchzerstraße) 1916-1919

Der Schwur

Ein Zimmer voll von Geschenken

Spionage

Verführung durch die Griechen. Schule der Menschenkenntnis

Der Schädel. Disput mit einem Offizier

Tag- und Nachtlektüren. Das Leben der Geschenke

Hypnose und Eifersucht. Die Schwerverletzten

Die Gottfried-Keller-Feier

Wien in Not. Der Sklave aus Mailand

Teil 5 (Zürich-Tiefenbrunnen) 1919-1921

Die guten Jungfern der Villa >Yalta<. Dr. Wedekind

Phylogenie des Spinats. Junius Brutus

Unter großen Männern

Fesselung des Ogers

Wie man sich verhaßt macht

Die Petition

Verbotsbereitschaft

Die Mäuse-Kur
Der Gezeichnete
Ankunft der Tiere

Kannitverstan. Der Kanarienvogel

Der Enthusiast

Geschichte und Schwermut

Die Sammlung

Auftritt des Hexenmeisters

Die schwarze Spinne

Michelangelo

Das verworfene Paradies

LITERATUR

- 1) 『救われた舌 (ある青春の物語)』
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 2) Die Fackel im Ohr
(Lebensgeschichte 1921-1931). Band 5404
『耳の中の炬火』(伝記1921-1931)
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 3) Das Augenspiel (Lebensgeschichte 1931-1937).
Band 9140
『眼の戯れ』(伝記1931-1937)
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 4) Masse und Macht
『群衆と権力(上・下)』
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 5) Die Blendung (Roman) 小説『眩暈』
池内紀訳 (法政大学出版局)
- 6) Die Stimmen von Marrakesch
(Aufzeichnungen nach einer Reise)
『マラケシュの声』ある旅のあとの断想
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 7) Dramen 戯曲『猶予された者たち』
池内紀・小島康男訳 (法政大学出版局)
Hochzeit『結婚式』小島康男訳
Komödie der Eitelkeit『虚栄の喜劇』小島康男訳
Die Befristeten 戯曲『猶予された者たち』
池内紀訳
- 8) Das Gewissen der Worte
Hermann Broch (Rede zum 50. Geburtstag,
Wien, November 1936)
Macht und Überleben (1962)
Karl Kraus, Schule des Widerstands (1965)
Dialog mit dem grausamen Partner (1965)
- 『酷薄な伴侶との対話』(日記と現代作家)
岩田行一・古沢謙次訳 (法政大学出版局)
- Realismus und neue Wirklichkeit (1965)
- Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice (1968)
- 『もう一つの審判』
カフカの「フェリーツェへの手紙」
小松太郎・竹内豊治訳 (法政大学出版局)
- Wortanfänge (Ansprache vor der Bayerischen
Akademie der Schönen Künste 1969)
- Hitler, nach Speer (Größe und Dauer 1971)
- Konfuzius in seinen Gesprächen (1971)
- Tolstoi, der letzte Ahne (1971)
- Dr. Hachiyas Tagebuch aus Hiroshima (1971)
- Georg Büchner (Rede zur Verleihung
des Georg Büchner-Preises 1972)
- Das erste Buch: Die Blendung (1973)
- Der Neue Karl Kraus (Vortrag, gehalten in der
Berliner Akademie der Künste 1974)
- Der Beruf des Dichters (Münchener Rede, Januar 1976)
- 9) 『断ち切られた未来』評論と対話
(ヒトラー, 孔子, トルストイ, 蜂谷道彦「広島
日記」, テオドール・アドルノとの対話, ホルスト・
ピーネクとの対話, ヨアヒム・シッケルとの
対話) 岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 10) Die Provinz des Menschen
(Aufzeichnungen 1942-1972)
- 11) 『断想 1942-1948』
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 12) Das Geheimherz der Uhr
(Aufzeichnungen 1973-1985)
- 13) Die Fliegenpein (Aufzeichnungen)
- 14) Der Ohrenzeuge (Fünfzig Charaktere)
『耳証人 新・人さまざま』
岩田行一訳 (法政大学出版局)
- 15) Aufzeichnungen 1992-1993
(Carl Hanser Verlag, 1996)
- 16) Wortmasken (Texte zu Leben und Werk von Elias
Canetti). Fischer Taschenbuch Verlag, Oktober 1995
- 17) Waltraud Wiethölter: Sprechen-Lesen-Schreiben.
Zur Funktion von Sprache und Schrift in Canettis
Autobiographie (Deutsche Vierteljahrsschrift für Lite-
raturwissenschaft und Geistesgeschichte, 64. Jahr-
gang, Heft 1, März 1990) (S. 149-171)
- 18) Horst Rüdiger: Über die Autobiographien Elias

- Canetti. In: Die Österreichische Literatur. Ihr Profil von der Jahrhundertwende bis zur Gegenwart (1880-1980). Herausgegeben von Herbert Zeman (Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Graz-Austria, 1989) (S. 989-999)
- 19) David Darby: A Literary Life. The Textuality of Elias Canetti's Autobiography. (Modern Austrian Literature, Volume 25. Number 2, 1992) (p37-49)
- 20) Martin Bollacher: Chaos und Verwandlung. Bemerkungen zu Canettis „Poetik des Widerstands“ (Euphorion, Band 73, 1979) (S. 169-185)
- 21) Alo Allkemper: Nirgends Rettung oder die moralische Quadratur des Zirkels. Zur 'Poetologie' Elias Canettis (Euphorion, Band 84, 1990) (S. 317-333)
- 22) Markus Fauser: Eremiten in der Bibliothek. Canetti's Büchermensch im Hinblick auf seine Verwandten bei Unamuno und Nabokov (Euphorion, Band 88, Heft 2, 1994) (S. 184-209)
- 23) Rüdiger Zymner: 'Namenlos' und 'Unantastbar'. Elias Canettis poetologisches Konzept. (Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 69 Jahrgang, Heft 3, September 1995)
- 24) Jürgen Söring: Die Literatur als „Provinz des Menschen“. Zu Elias Canettis Aufzeichnungen (Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 60 Jahrgang, 1995) (S. 645-666)
- 25) Julian Preece: The Significance of Johann Peter Hebel's "Das Schatzkästlein" in Elias Canetti's Three-Volume Autobiography (Modern Austrian Literature, vol. 33, No. 2, 2000) (p. 73-82)
- 26) Franz Baermann Steiner: Feststellungen und Versuche. Aufzeichnungen über Gesellschaft, Macht, Geschichte und verwandte Themen (Akzente, 42. Jahrgang, Heft 3, Juni 1995) (S. 213-227)
- 27) Jeremy Adler: Die Freundschaft zwischen Elias Canetti und Franz Baermann Steiner (Akzente, 42. Jahrgang, Heft 3, Juni 1995) (S. 228-231)
- 28) Mario Erdheim: Canetti und Freud als Leser von Schrebers „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken“ (Akzente, 42. Jahrgang, Heft 3, Juni 1995) (S. 232-252)
- 29) Dagmar Barnouw: Elias Canetti zur Einführung (Junius Verlag, 1996)
- 30) David Roberts: Kopf und Welt, Elias Canettis Roman >Die Blendung< (Carl Hanser Verlag, München, 1975)
- 31) Piet van Meeuwen: Elias Canetti und die bildende Kunst von Bruegel bis Goya (Peter Lang Verlag, Frankfurt am Main, 1988)
- 32) Marcel Reich-Ranicki: Mein Leben (Deutscher Taschenbuch Verlag, 2001)
- 33) 書評：川村二郎 (読売新聞 2002年4月21日) マルセル・ライヒ＝ラニッキー著：わがユダヤ・ドイツ・ポーランド
- 34) Die Bibel (Jubiläums-Taschenbibel, Hergestellt 1964 in den Werkstätten der Württembergischen Bibelanstalt Stüttgart)
- 35) 旧新約聖書 (日本聖書教会, 1975)
- 36) エリ阿斯・カネッティ (変身と同一) ユセフ・イシャグブル著 川俣晃自訳 (法政大学出版局)
- 37) 文学的世界像 (7人のドイツ作家たち) エーバーハルト・ヒルシャー著 大川勇・奥田敏広・山根宏訳 (発行所エディション q) (249-285ページ)
- 38) 格子窓の女 (Elias Canetti: Die Frau am Gitter) 藤川芳朗・福永輝雄編 (白水社1978)
- 39) 獣たちの伝説 (東欧のドイツ語文学地図) 平野嘉彦著 (みすず書房 2001) 獣と死者をめぐる思想—エリ阿斯・カネッティ (125-143ページ)
- 40) ハプスブルク帝国史入門 (The Habsburg Empire 1804-1918) ハンス・コーン著 稲野強・小沢弘明・柴宜弘・南塚信吾共訳 (恒文社 1982)
- 41) 夏目漱石「私の個人主義」 日本ペンクラブ電子文藝館 (2002-4-15)